# 民國拾八年滿洲出稼移民移動狀況

滿鐵調査課

# 凡例

一、本書は民國十八年(昭和四年)に山東、河北、河南各省及其他各地方より滿洲に渡來したる出稼移民(避難民、移民、農業勞働者、苦力等を含む)の移動狀況を調査したものである。

二、民國十六、十七兩年度編は出稼時期たる上半期のみに限りて之を記述したが、出稼移民の定著力を求めんとするには歸還數を徵するの要あり、故に歸還時期なる年末まで範圍を延長し全年に涉つて記述を試みた。

三、本書の記述は滿蒙事情通卷第百二號發表の數字を經とし、當方の照會に對する各所の回答及各地の情報を緯として調整せるものであるが、船舶、鐵道の出稼移民統計と雖も、輸送途上出稼移民と一般人とを明確に判別することは頗る困難なる事情にあり、尙幾多不審の點あるを免れぬ。又奧地各地の回答と輸送統計との間にも可成な相違が認められ、如何に兩者を取捨撰擇すべきかに就て迷はざるを得ず、其の結果本書の骨子を爲す奧地分布概況の推定に當り、輸送統計を主とし、各地の回答を從とせるも、不充なるを免れぬ。

四、本書の不備の點は其の責、筆者の研究不充分に歸することは雖も一方出稼移民は個人及官憲の滿蒙紹介に依り次第に出身地の範圍を擴大し、其の移動は愈々複雜多岐に涉らんとする傾向があり、關係各箇所の御盡力を俟たずしては到底完璧を期し難い。

# 民國十八年滿洲出稼移民移動狀況

## 目次

五、擔當者は當課職員栗本豐である。

昭和五年三月

滿鐵調査課

# 民國拾八年滿洲出稼移民移動狀況

## 第一章　民國拾八年滿洲出稼移民概況

民國十八年即ち昭和四年度は出稼移民激增の年度たる昭和二年以來丁度滿三年に當る。東三省對國民政府の南北對立に因り、年中行事の如く行はれた北支那を中心とする紛糾、及びそれに因つて釀成された內亂は、民國十七年七月東三省の中央歸順以來、今日まで休息の形であり、出稼避難民の出身地たる直、魯兩省地方は久し振りに小康維持の狀態を現出した。此の事は過去二箇年の移民激增の主因が內亂並に之に因つて釀成された匪禍、稅禍等の禍害に在つたことを想起することに據り、自然の歸趨として昭和四年度移民の激減を豫想せしむるものである。然るに本年南滿三港上陸者統計並に陸路入滿者の推定數計算の結果は約百零八萬にして依然百萬を超過してゐる。昭和二年度約百二十餘萬、同三年度約百十餘萬の入滿數に對しては明らかに減退したとは云へるが、但し其の減少額は吾人の豫想を裏切る程の僅少の差異にしか過ぎなかつた。然らば時局漸定後の本年に見た多數の移民は如何なる動機に離鄉渡來したか、其の精確なる眞相は彼等の出身地の最近に於ける事情を詳らかにせざる限り困難である。併し乍ら大體の見當は附かないことはない。即ち內亂の終熄は事實なりと雖も、單に表面的にして、時局安定の永續性に對し屢々疑念を抱かされる如き風雲の動きが山西、河南、山東の西南部等の各地方に當つて認められたこと、

以上に據り時局漸定後の本年度の移民が依然百萬を超過せるの事實は、明白に大體過去二箇年に於ける激增移民の滿蒙紹介の結果たるの結論が得られた。昭和四年度移民の百萬臺支持の事情斯くの如しとせば、恐らく今後相當永き將來に亙つて、支那本部より滿洲に向つて注ぐ移民の洪水は、特殊の事情の勃發せざる限り百萬內外を下ることはあるまいとの豫想も許される。

併し乍ら出稼移民總數の前年に對する減少は以上の如く少數に止まりしも、其の內容を調ぶるに可成な變化を認むることが出來る。其の主なるものは先づ第一に海路入滿者の仕出地別に現はれた。青島乘船者の減少、芝罘、龍口の增加である。即ち青島港乘船數は昭和二年約三十六萬、同三年約二十九萬なるに對し、本年は約二十四萬である、之に對し芝罘、龍口は前年よりも約二、三萬宛增加を呈した。（詳細は第二章第三節第三項參照）

第二は陸路北寧線及營口經由入滿者の中に約十二萬の河南省避難民の新參加があつたことであつて、之は前年河南省方面を襲ふた饑饉に加ふるに、本年四五月頃の時局が彼等を脅威して離鄕せしめたものであつて、徹底的に旅北河南同鄕會の斡旋に依れるものゝ如く、主として、黑龍江省及興安屯墾區に紹介されて定著した妻子眷族帶同の永住移民であつた。

第三は入滿咽喉地到着後の彼等の移動に比較的避遠地敬遠の傾向が窺はれたことである。即ち北滿到著數は昭和二年度上半期約三十六萬、昭和三年同期約四十三萬であつたが、本年は上半期約二十八萬全年約三十九萬と云ふ著しき減退である。

又內亂終熄後漸進的にでも稅禍、匪禍を掃蕩せんとする努力が拂はれたであらうか、水害、旱蝗害等の天災はなかつたであらうか、思を此處に致すとき、或は動亂中に比すれば以上の禍根に因る被害は比較的減せられたかも知れないが、未だ〱住民にとつて腰を落著けて業を樂しみ得る程の安定は決して與へられて居れないと云つても過言では無からう。假に今一歩を讓つて之等前二箇年の移動の主因を爲した叙上の禍根は凡べて除去されたとするも、滿蒙移住の根本的原因は、支那本部に於ける人口過剩の渦卷であり、滿蒙に於いて誘引する經濟的に優利な諸條件厖大なる人口包容力である。斯くして本年度に見た百零八萬の移民は過去二箇年に於ける激增移民が滿蒙紹介の役目を果せるの結果たることは明白である。

思ふに昭和二、三兩年度に於ける夥しき民族の移動は內外識者の注意を喚起した。しかしそれよりも以前に當つて、彼等の移動は同樣の境遇の下に鄕里に居殘る同鄕の關心事であり、離鄕者の移住後の生活狀態の如何は興味の中心を爲すものでする。所謂災害の環境に地下に眠る先祖の靈を守らればならぬ義務が、彼等に忍住を强ひ、故鄕放棄の決心を躊躇せしめてゐることは誤りなき事實にして、其處にも祖先崇拜の念厚き鄕土意識强き、慣習の偉大なる力を見ることが出來るが、或は出稼者の歸省に依り、或は移住者の音信に據る滿蒙の天地に關する報導は全く彼等の無關心たり得るものではない。事實彼等の紹介は官廳の上下式の所謂東北四省移住獎勵の宣傳よりも遙に效果あることは、官憲の躍起の獎勵も、甘言的な招致策も、同鄕會の盡力を俟たずしては効力を奏し得ない一事に據つて容易に首肯し得るところである。

# 第二章　出稼移民數

## 第一節　出稼移民總數

昭和四年度中に南滿三港及北寧線に據り來滿したる移民數は滿蒙事情（通卷第百二號）に次の如く發表された。

昭和四年度出稼移民經路別統計

| 經路別＼期別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 大連 | 三二一、一一六 | 五一二、九四七 |
| 營口 | 七九、〇九八 | 一四八、五七七 |
| 安東 | 二四、二七四 | 五三、五五七 |
| 奉天 | 二〇〇、八八〇 | 三三一、二一〇 |
| 合計 | 六二五、三六八 | 一、〇四六、二九一 |

註　本表數字は滿蒙事情通卷第一〇二號に據る奉天の中には瀋陽、皇姑屯下車數も含まる。

右表の指示に隨へば本年度各經路に據り渡來した出稼移民は上半期約六十二萬、全年約百四萬なるも、之を以て出稼移民の正確なる總數なりとするには、左に列擧の如く尙幾多考慮すべき餘地を存する。

一、各海港上陸者に滿洲內移動者を含むこと

第四は歸還數の增加である。即ち歸還數は昭和二年約三十四萬、昭和三年約三十九萬に對し、本年は六十二萬餘の多數を示し、前年よりも約二十餘萬の著增を來した。

第五は興安屯墾區が愈々開墾事業に着手して、河南省避難民約五千六百名を募集したことである。

大體本年度の前兩年度に對する主要なる變化は以上列擧の如くにして、即ち第一、第三、第四は明かに永住的移民の減退を指示するものなるが、第四の歸還數の增加には前二年の移民增加に因り滿洲に堆積した出稼者の歸還が含まれてゐる。第二は出稼移民出身地の擴張にして、過去に於ける移民激增に自覺を促された支那朝野の識者は、支那本部諸省の人口問題を緩和すべく、極力移民の範圍を擴張せんとしつゝあるから將來出身地の範圍は次第に南下し、次第に複雜化すると豫想される。第五の興安屯墾區は僅に五千六百餘名の移民を收容したに過ぎないが、初年度としては決して不良な成績ではない。最近民國十九年度（昭和五年）に於て約二三十萬の移民を募集せんとの意氣込なることが紙上に掲載されたが、資源開發と國防充實との重要なる役目を持ち、自ら地方開拓と植民との先導的立場にある興安屯墾公署の將來に於ける活躍は、蓋し滿洲植民史上に一異彩を放つものであらう。

斯くして內亂が口火となつて激增した移民數は、容易に減ぜざるべき趨勢に在り、滿洲移民そのものに內外の視聽を集めた許りでなく、排外熱の旺盛なる折柄支那政府をして、滿蒙に於ける外國の勢力との角逐を人口數に依つて解決せんとの新戰法を自覺せしめた形となり、滿洲に對する支那の植民は經濟的に、政治的に、軍事上に一層重要性を增加したと見らるゝのである。

以下各章に亙つて詳細なる移動狀況を記述する。

## 大連港上陸出稼移民仕出地別統計

| 仕出地別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 靑島 | 一四三、二九六 | 二二二、八五〇 |
| 芝罘 | 六八、一四九 | 一二四、七三六 |
| 龍口 | 六一、九二三 | 九二、一八三 |
| 天津 | 三七、〇九九 | 四九、〇〇五 |
| 安東 | 七、七五七 | 一七、五三三 |
| 其他 | 二、八九二 | 六、六四〇 |
| 合計 | 三二一、一一六 | 五一二、九四七 |

右表中滿洲内移動者たる安東港乘船者を控除すれば、本年上半期に於ける大連港經由入滿數は前掲三一三、三五九人となり、全年に於いては四九五、四一五人となる。

### 第二項　營口上陸數

本年度營口上陸者として海關に報告せられたるものを仕出地別に表示すれば次の如くである。

## 營口上陸支那人船客仕出港別統計

| 仕出地別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 靑島 | 一、七八〇 | 二、五四一 |
| 芝罘 | 五〇 | 三一〇 |

二、營口、安東兩經路數字は海關報告の支那人船客にして實際員數を求めんとするに兩地の事情を斟酌して、夫々れ加減を要すること

三、北寧線關係の數字には途中下車數、打通線轉乘者數及徒步入滿者の計上が省略されてゐること

以上の缺點を考慮した計算の結果は次の如くである。

| 經路別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 大連 | 三一三、三五九 | 四九五、四一五 |
| 營口 | 一〇一、二四五 | 一九〇、一七八 |
| 安東 | 一九、四一九 | 三七、四八九 |
| 陸路入滿者 | 二二五、九七七 | 三五六、九一八 |
| 合計 | 六六〇、〇〇〇 | 一、〇八〇、〇〇〇 |

即ち本年上半期に於ける出稼移民の渡滿總數は約六十七萬であり、全年渡來者總數は約百〇八萬である。前兩年に比し、減少したとは云ふもの、猶百萬を超過してゐるのである。本數の據つて來る故以は次節各項に於いて之を記述する。

## 第二節　經路別入滿數

### 第一項　大連上陸數

本年度大連港上陸者を仕出地別に表示すれば次の如くである。

右安東上陸支那人般客中出稼移民數の含有率を出稼時期たる上半期八〇%、全年七〇%とし、之を推算すれば、本年全年の出稼移民の安東上陸者は三七、四八九、にして其の中上半期に於ける上陸者は一九、四一九人となる。

### 第四項　陸路入滿數

一、北寧線奉天下車數

北寧線關係の出稼移民に關しては確實なる數字を得ること困難にして本年は奉天驛乘車滿鐵主要驛分布數に根據して之を推算した。（第三章第三節第四款参照）即ち北寧線奉天下車數の合計は上半期約二十萬、全年約二十九萬である。前年上半期に對し約五萬の減少を來したるも、本年は打通線難民無賃輸送の特點普及の結果、同線利用者に著增を見たると、本年渡來者の一般的減少に外ならぬ。猶前記北寧線下車數中奉天、瀋陽、皇姑屯三驛の占むる割合は奉天六割他の二驛各々二割だと稱されてゐるから。此の比率に據つて計算すると左に表示の如くなる。

| 驛別　期別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 奉天驛 | 一二〇、〇〇〇 | 一七四、〇〇〇 |
| 瀋陽驛 | 四〇、〇〇〇 | 五八、〇〇〇 |
| 皇姑屯驛 | 四〇、〇〇〇 | 五八、〇〇〇 |
| 計 | 二〇〇、〇〇〇 | 二九〇、〇〇〇 |

二、打通線轉乘數

本年度打通線利用者は上半期約二萬、全年約六萬見當である。（第四章第一節第四項参照）

| | | |
|---|---|---|
| 龍口 | 二四、七七三 | 四七、五三二 |
| 天津 | 四七、三三〇 | 八九、七五九 |
| 大連 | 一九二 | 一九二 |
| 其他諸港 | 四、九七三 | 八、二四三 |
| 合計 | 七九、〇九八 | 一四八、五七七 |

右海關報告數を根據こして最近三箇年大連港上陸出稼移民數の海關報告數に對する平均超過率（二・八％）に依つて、營口上陸の出稼移民數を推算すれば、上半期は一〇一、二四五人こなり、全年は一九〇、一七八こなる。

### 第三項　安東上陸數

次に掲ぐる仕出港別安東上陸者數こ營口こ同樣海關に報告內せられたる支那人船客數である。

安東上陸支那人船客仕出港別統計

| 仕出地別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 青島 | 七、七七〇 | 一四、三三七 |
| 芝罘 | 六、六七五 | 一九、八二四 |
| 龍口 | 二、二七八 | 四、一七六 |
| 天津 | 二、二八九 | 三、二二九 |
| 大連 | 四、六三六 | 一〇、七八九 |
| 其他諸港 | 六二六 | 一、二〇二 |
| 合計 | 二四、二七四 | 五三、五五七 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 營口 | 六三、三一九 | 一一・三 | 一五三、七七一 | 一四・六 | 六一、四三三 | 一〇・七 | 一五二、五五六 | 一六・三 | 六九、〇九八 | 一四・五 | 一四八、五二七 | 一六・七 |
| 安東 | 二九、五七五 | 五・三 | 七八、八七九 | 七・五 | 二五、九九〇 | 四・五 | 五三、七〇三 | 五・六 | 二四、二七四 | 四・五 | 五三、五五七 | 六・一 |
| 海路合計 | 四二六、五〇三 | 七五・九 | 八三二、一〇二 | 七九・二 | 四三三、一八八 | 七三・七 | 七二一、八二三 | 七五・九 | 四二四、四八八 | 七六・九 | 七一五、〇八一 | 八〇・五 |
| 奉天 | 一三五、六二六 | 二四・一 | 二一八、七二六 | 二〇・八 | 一五〇、九〇〇 | 二六・三 | 二三六、六六〇 | 二四・一 | 一三〇、〇〇〇 | 二三・一 | 一七四、〇〇〇 | 一九・五 |
| 合計 | 五六二、一二九 | 100 | 一、〇五〇、八二八 | 100 | 五八四、〇八八 | 100 | 九五八、四八三 | 100 | 五五四、四八八 | 100 | 八八九、〇八一 | 100 |

註　本表に於ける安東、營口の數は海關報告數にして、奉天の數は北寧線、皇姑屯、瀋陽兩驛數を含まない。

右合計欄を見るに上半期は昭和三年度最高なるも、全年に於ては昭和二年を最高とし、漸減の傾向がある。併し乍ら其の差異は最も多數を呈した三年と最少の四年との比較に於てすら十五萬内外に止まる。隨つて之を入滿咽喉地別に觀たとて各年の間に著しき相違のある筈がない。

先づ本年上半期に於ては前兩年度に對し、大連、安東上陸者は共に減少を呈せるに反し、營口には之と同數以上の增加ありたる爲、前二年に入滿總數に對する比率一一％内外なりしを一四％に增進した。故に海港上陸者の合計に於ては昭和二年より約二千人減少し、同三年よりは約一千三百の增加にして、其の差異極めて微少なりと云ふことが出來る。一方奉天驛下車數は三萬四千の減少にして、其の原因は打通線轉乘者の增加に歸すべきであらう。然して全年を通じて觀たるときは奉天驛下車數の減少のみ目立ち、他は殆んど員數に於いても比率に於ても前年と差異がない。

## 第二項　仕出地別比較と出身地省別比較

三、徒步入滿數

徒歩者は避難民の取扱を受け得ない範圍に限られたるを以て、從來に比し激減したこ考へられる。前掲上半期五、九六八、全年六、九一八の推定數は前五項數字端數を理合せたものにして他に何等合理的根據を有たぬものである。

## 第三節　最近三箇年の比較

直魯兩省からの出稼移民の激增は民國十六年（昭和二年）からのことにして、激增の理由其他に就いては既に民國十六年度編、同十七年度編に於いて既述し盡されたるを以て、こゝでは專ら激增後の三箇年に就いて經路別、仕出地別、月別の比較を試みる。

### 第一項　經路別比較

前節各項に於ける本年出稼移民數を經路別に昭和二、三兩年度こ對照表示すれば次の如くである。

最近三箇年出稼移民數各經路別統計

| 年次／期別／經路別 | 昭和二年 | | | | 昭和三年 | | | | 昭和四年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 大連 | 二三三、六〇九 | 五九・三 | 五九九、四五二 | 五七・一 | 三三五、七七六 | 五八・五 | 五〇六、五五三 | 五四・〇 | 三二一、一二六 | 五・八九 | 五二二、九四七 | 五七・七 |

千の增加を見、後者に約一萬四千の增加を呈して、其他諸港との增加と併せて、青島の減少數だけ補塡してゐる。

右天津の增加は河南省移民の參加に基因し、敍上營口上陸者上半期に於ける增加と關係があり、青島の激減、龍口の增加は移住者及避難民の減少、出稼者の增加と考へられ、後述本年度北行者の減少も、斯の如き仕出地別比較に依つて想像し得られる移民の質的變化に基因するものゝ如くである。猶全年に於いても大體同傾向なるもたゞ天津は上半期に約一萬四千の增加を示したにも拘らず、全年には約六千の減少を呈した。之に依つて想ふに河南省方面からの避難民の渡來は極めて短期間に行はれたものである。安東からの渡來者即ち滿洲內移動者の漸增は歸還經路の都合上一時大連に上陸するものにして、二年前の激增に據つて安東方面にも堆積した移民が歸還數の增加を齎らした結果と認むべきものである。

## 二、出身地省別比較

以上に據り入滿者の出身地を省別に割出して見ることゝする。即ち前揭表、天津、安東其の他諸港を除く外は全部山東省よりの渡來者と看て差支へがない、天津港乘船數は地理的事情から考慮して約六割の河北省（舊直隸）住民を含むとし、殘餘の數には山東省西南部及河南省民が同率に含むとして計算すれば次の如くである。

| 出身地別 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 山東省 | 七一六、六二二 | 八七・二 | 六〇三、八七〇 | 八六・三 | 五六七、八〇九 | 八一・四 |

一　仕出地別比較

次に渡來者を仕出地別に比較して其の消長を見ることゝし、先づ海港上陸者の仕出地を表示する。

最近三個年海路渡來者の仕出比地別比較

| 仕出港別＼期別＼年次 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青島 | 二〇二、五五一 | 四七・五 | 三六一、〇五七 | 四三・四 | 二〇二、九三八 | 四八・〇 | 二八八、二九七 | 四〇・五 | 一五二、八四六 | 三六・〇 | 二三九、七二八 | 三三・五 |
| 芝罘 | 七五、〇四九 | 一七・六 | 一七一、九五七 | 二〇・七 | 七四、四三九 | 一七・六 | 一二八、三三七 | 一八・〇 | 七四、八七四 | 一七・六 | 一四四、八七〇 | 二〇・三 |
| 龍口 | 五五、七九〇 | 一三・一 | 一〇四、五一五 | 一二・六 | 六一、七七〇 | 一四・六 | 一一九、四七四 | 一六・八 | 八八、九七四 | 二一・〇 | 一四三、八九一 | 二〇・一 |
| 天津 | 八二、五四四 | 一九・四 | 一五八、〇六六 | 一九・〇 | 七四、〇五〇 | 一七・五 | 一四八、三三六 | 二〇・八 | 八六、七二八 | 二〇・五 | 一四一、九九三 | 一九・九 |
| 安東 | 三、一四九 | 〇・七 | 一〇、七三五 | 一・三 | 五、五〇四 | 一・三 | 一二、三三七 | 一・七 | 七、七五七 | 一・八 | 一七、三二三 | 二・五 |
| 大連 | 三、八一五 | 〇・九 | 一五、八六六 | 一・九 | 二、八三六 | 〇・七 | 八、四七二 | 一・二 | 四、八二八 | 一・一 | 一〇、九八一 | 一・五 |
| 其他諸港 | 三、六二八 | 〇・九 | 九、九一六 | 一・二 | 一、六五一 | 〇・四 | 六、七六九 | 一・〇 | 八、四九一 | 二・〇 | 一六、〇八六 | 二・二 |
| 海路計 | 四二六、五二六 | 100 | 八三二、一〇三 | 100 | 四二三、一八八 | 100 | 七一一、八二三 | 100 | 四二四、四九八 | 100 | 七一五、〇八一 | 100 |

右表に據れば上半期上陸者の合計は殆ど大差を見ないが、其の內容に至つては可成な變化が窺はれる。即ち青島の前年に對する減少は五萬にして芝罘からの渡來者は殆ど差異を認めぬ、龍口、天津の兩港からは前者に約二萬七

| | |
|---|---|
| 山東省 | 七四二、〇〇〇人 |
| 河北省 | 一七二、〇〇〇人 |
| 河南省 | 一一七、〇〇〇人 |
| 其他 | 一六、〇〇〇人 |
| 合計 | 一、〇四七、〇〇〇人 |

註　海港上陸者を海關報告數に據つた爲本年入滿總數と三萬三千の差異を來した。

### 第三項　月別比較

次に出稼移民數を月別に列擧して最近三箇年に於ける移動の時期的考察を試むる。

之に就ては凍結の爲航行不能期間ある營口、安東の兩港及確數の得られない北寧線入滿者を加算して計上するよりも、大連港上陸者のみに就て月別表示する方が、却つて移動の情勢を窺知するに適當だと考へられる。故に次表は他の三經路數字を省略し、大連のみ數字に據つて作成した。

大連上陸出稼移民月別統計

| 年別／月別 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一月 | 一三、三三九 | 二・三 | 一五、六六三 | 三・一 | 二〇、二四三 | 三・九 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 河北省 | 九四、八四〇 | 一一・五 | 八八、九三六 | 一二・七 | 八五、一九六 | 一二・二 |
| 河南省 | — | — | — | — | 二八、三九九 | 四・一 |
| 其他 | 九、九一六 | 一・二 | 六、七六九 | 一・〇 | 一六、〇八五 | 二・三 |
| 合計 | 八二一、三七七 | 一〇〇 | 六九九、五七五 | 一〇〇 | 六九七、四八九 | 一〇〇 |

註　一、本表には滿洲内移動者と認むべき安東乘船數を計上せず。
二、昭和二、三兩年度に於ける河南省民の移住は殆ど皆無と看做し、天津港上陸者の六割を河北、四割を山東として計算し四年度は河北六割、河南、山東各二割の計算にて、天津及其他諸港を除く他は全部山東に含めた。

右表は註記の如き薄弱なる理由に根據して計算されたるものなるを以て、嚴格なる出身地省別の比較は困難ではあるが、大體入滿總數に見た本年度の減少額は山東省民の減少と看做して差支へあるまい。

陸路入滿者の出身地別考察は出身地の範圍擴張と共に愈々困難を來した。故に比較的記述は省略し、本年度數のみに就いて大體の見當を附する。

先づ打通線轉乘の避難民約六萬は奥地情報の綜合に據れば殆ど全部河南省民と看做される。北寧線に依り奉天に到著した者の數は、從來其の七割强を山東省民とする觀察が最も多く行はれてゐる樣であるが、本年は、海港に於けると同樣の減退を見たと假定して、山東二、河北三、河南の割合に據つて計算すると、山東省約十七萬四千河北省約八萬七千、河南省約二萬九千である。

以上に據り本年度入滿總數の出身地別概算は次の如くである。

せめて最後の正月だけでも地下に眠る祖先と共に迎へたいとの希求に因り、出稼者は又二年乃至三年の間、異域に味はつた孤獨の寂寥を慰すべく歸還した程であるから、少なくとも彼等の鄕里滯在は半箇月以上に渡り、大體兩者共に元宵節（舊の正月十五日）を終へてから離鄕し初むる。前表に於いて一月が最低を示す所以も先づ同樣の理由に據り說明し得られる。昭和三年に於ける二月は約九萬三千にして、四年同月の約二萬に比し、約七萬の差異あるも、右は陰曆正月の遲速に左右されて、彼等の移動が、多少早かつたり、遲かつたりするものと考へられる。

次に一年を三期に區分して最近三箇年の移動の變化を窺ふこととする。

| 年次 ／ 月次 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一月—四月 | 二七六、三六八 | 四六・一 | 二八七、八五四 | 五六・八 | 二四三、五六七 | 四七・五 |
| 五月—八月 | 一一〇、〇九八 | 一八・五 | 九六、四七九 | 一九・〇 | 一四四、三六五 | 二八・一 |
| 九月—十二月 | 二一二、九六六 | 三五・五 | 一二二、二二〇 | 二四・一 | 一三五、〇一五 | 二四・四 |
| 合計 | 五九九、四三二 | 100 | 五〇六、五五三 | 100 | 五二二、九四七 | 100 |

即ち本表に於ても一月乃至四月の最初の四箇月が他の二期に比べ、最多數を占むる點に於て三箇年とも一致してゐる。併し乍ら昭和二、三兩年度に於て、第二期の五月乃至八月間が最少數なるに對し、四年度は最後の九月乃至十二月の四箇月間が最低を示した。之れ最後の四箇月は大體歸還時期なる爲、出稼の場合は一年中最も少數なるべ

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 二月 | 三八、五一五 | 六・四 | 九三、一二四 | 一八・四 | 二〇、八七八 | 四・一 |
| 三月 | 一五四、八〇三 | 二五・八 | 一二九、七六〇 | 二五・六 | 一三九、五〇二 | 二七・三 |
| 四月 | 六九、七三一 | 一一・六 | 四九、三五八 | 九・七 | 六二、九四六 | 一三・三 |
| 五月 | 四〇、三七一 | 六・七 | 二五、八六七 | 五・一 | 四五、三〇九 | 八・八 |
| 六月 | 一六、八七三 | 二・八 | 二二、〇五五 | 四・四 | 三三、三七六 | 六・三 |
| 七月 | 二〇、七四七 | 三・五 | 二一、五七三 | 四・三 | 三五、七五〇 | 七・〇 |
| 八月 | 三二、一〇七 | 五・四 | 二六、九八四 | 五・三 | 三〇、九三〇 | 六・〇 |
| 九月 | 四六、〇〇六 | 七・七 | 二九、五三六 | 五・八 | 二九、四三三 | 五・七 |
| 十月 | 六九、一三〇 | 一一・五 | 三一、六六一 | 六・二 | 三四、六一六 | 六・七 |
| 十一月 | 六〇、一四一 | 一〇・〇 | 三三、二五九 | 六・六 | 三八、四八七 | 七・五 |
| 十二月 | 三七、六八九 | 六・三 | 二七、七七四 | 五・五 | 二三、四七九 | 四・四 |
| 合計 | 五九九、四五二 | 100 | 五〇六、五五三 | 100 | 五三二、九四七 | 100 |

右に據れば各年共三月が最高を占め、四、五、二月の順位にして、明白に出稼時期なるものを窺ふことが出來る、是説明するまでもなく不慣れな避遠地への移住は、經濟的原因として、所謂結氷時期なる事業冬眠時期を選ぶことは、直に生活資料吸收の不可能なるばかりでなく、防寒設備其他に多額の經費を要し貧窮なる彼等の能くし得ざることで、寒氣減退時期まで移住を延期するを以て適當とすること。移住を强制する動亂が從來主として解氷と時を同じうしてゐることも其原因であるが、見逃すべからざるは慣習的原因にして、永久に鄉里を離れんとするものは

# 第三章　滿鐵主要驛分布狀態

## 第一節　總　　說

既述各海港上陸者及び陸路京奉線に據る入滿者は、其の一部は各海港の自由勞働者として同地に留まり、他は悉く或は汽車に搭乘し、或は眷族相携へて徒步を以て落着地まで北行するものである。而して彼等の落着地なるものは其の目的の如何により主要驛並に附近村落もあり、遠く鐵道線路を離れた未耕地もあり、他線轉乘後更に徒步數日を要するが如き僻遠の地もある。故に滿鐵線主要驛なるものも都市勞働者の包容力に大小の差異こそあれ、出稼移民に關する地位は何等海港のそれと變るところが無い。即ち嚴格なる意味に於ける移民の落着地としての價値は極めて低位にある。隨つて滿鐵線主要驛の分布狀態は、背後地進入者及他線轉乘者の推定の根據として其の重要性が認められるに過ぎない。

併し乍ら滿鐵線主要驛への分布は大連、營口よりの貨車輸送によるもの（實數）と奉天、安東よりの客車搭乘者（推定數）に就いてのみ明瞭であり、他の大連、營口よりの客車搭乘車及各入滿經路よりの徒步者數明らかならざるを以て、今のところ滿鐵線主要驛分布の確數は把捉するに由ない譯である。以下各項に於いて貨車、客車に依る主要驛分布數、各海港並奉天殘留數徒步者數の概略に就て敍述する。

きが常態こ考へられ、此の點本年度に見る移動狀況は稍々常態に歸したものであるこ謂へる。反對に昭和二年度最後の四箇月間に比較的多數の出稼移民あるは、同年度兵燹の影響を受けて、時期以外に流れ込んだ避難民こ看做すべきである。而して三箇年中移動數の最高率は昭和三年度の最初の期間である。

尙前表に據つて出稼時期以外移動數の想像外に在ることを敎へられる。之に關しては充分硏究の結果でなければ明言出來ないが、或は從來出稼移民こ看做してゐたデッキパッセンジャーの中にも日本內地こ滿洲の間に於ける邦人の移動こ全然同樣な移動が山東、河北兩省こ滿洲この間に行はれてゐるのではないかこも思はれるのであるが、之等の事情を考慮するこき、精確なる移民數を推知するここは愈々困難を感ずる譯であるが、此處では暫らく從來の觀方に依る。

註　昭和二三兩年度其他欄數字には行先不明の無貨輸送を含む

右の如く本年大連、營口よりの貨車搭乘者、奉天、安東よりの客車搭乘者は、合計に於いて、前年に對し上半期約九萬、全年約十二萬の異數なる減少を見る。隨つて各驛の分布數に就いても減少あるばかりでなく其の比率の示すが如く主要驛別にも可成な變化あるを認む。就中長春の激減、奉天の比率的增加が注意を惹く。右は陸路入滿者の一部に打通線轉乘者のあつた特殊な事情の存在する本年に、同線を含まざる前掲數字を以て北行者の減少を推斷するこは或は早計なりこの非難は免れぬかも知れないが、次項入滿咽喉地に於ける殘留者の增加こ本項汽車搭乘者の減退等こ相俟つて本年度渡來者の北進の步調を鈍らす何等かの理由の潛在することを說明するものであるこ解すべきか、或は又永住、半永住者的移民の減退を指示するものこ判斷すべきかである。

## 第二項　入滿咽喉地殘留者

入滿咽喉地に於ける殘留者數は汽車に依る北上者及徒步北上者の一切か判明しさへすれば自ら明瞭こなる譯であるが、右兩者こも不明なる以上他に根據を求めて推算せねばならない。今之を歸還の場合に於ける大連、營口、奉天各驛の下車數こ、奉天に於ける北寧線搭乘者數この差引による殘餘の數を殘留者こ看做せば左に列擧の如くである

最近三個年歸還の場合に於ける各經由地別下車數に對する離滿數の超過

| 經路別／年次 | 大連 | 營口 | 奉天 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 九七、二八三 | 二六、九五五 | 七四、五八八 | 一九八、八二六 |

## 第一項　滿鐵主要驛分布數

叙上の如く滿鐵線主要驛分布の確數は得られないが、其の分布狀態に就ては、大凡の見當はつかないことはない。

茲では次に掲げた大連、營口兩驛からの貨車輸送數と奉天、安東からの客車搭乘數合計に據り、本年度の分布狀態を概見する。

| 年次 | 昭和二年 | | | | 昭和三年 | | | | 昭和四年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| 仕向驛 | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員新 | % |
| 鞍山 | 三、三六二 | 〇・九 | 九、四〇八 | 一・八 | 四、八〇六 | 一・一 | 一〇、八六八 | 一・六 | 五、七七三 | 一・六 | 一〇、八九八 | 一・九 |
| 奉天 | 六三、四二一 | 一六・一 | 六八、九四七 | 一四・七 | 五一、〇二四 | 一一・二 | 七三、九六二 | 一一・一 | 五三、八四四 | 一四・五 | 八〇、一三九 | 一三・七 |
| 鐵嶺 | 八、九二九 | 二・三 | 一〇、四三五 | 一・九 | 一八、〇四六 | 三・九 | 三一、六一八 | 四・七 | 一五、一三七 | 四・一 | 二九、九三五 | 五・一 |
| 開原 | 二八、三三九 | 七・二 | 三六、六〇九 | 六・八 | 二六、六〇七 | 五・八 | 四五、〇四六 | 六・七 | 二三、九九七 | 六・三 | 四一、〇九三 | 七・一 |
| 四平街 | 一八、一九八 | 四・六 | 二〇、七三四 | 三・九 | 二〇、〇六六 | 四・四 | 三三、二一七 | 五・〇 | 二一、九八一 | 六・〇 | 四〇、二〇七 | 六・九 |
| 公主嶺 | 七、〇三五 | 一・八 | 九、三六八 | 一・七 | 八、八六四 | 一・九 | 一三、八六三 | 二・一 | 九、五五一 | 二・六 | 一四、四三三 | 二・五 |
| 長春 | 二〇三、一二四 | 五一・六 | 二六九、九七三 | 五〇・四 | 二三九、五五八 | 五二・四 | 三二七、四八五 | 四九・〇 | 一八一、三九七 | 四九・七 | 二六八、〇九〇 | 四五・九 |
| 撫順 | 四二、六九一 | 一〇・八 | 六四、七二〇 | 一二・一 | 五五、五四二 | 一二・一 | 八七、三〇七 | 一三・一 | 四一、二二六 | 一一・三 | 七〇、九一七 | 一二・二 |
| 本溪湖 | — | — | — | — | 九、〇三五 | 二・〇 | 一三、六六四 | 二・〇 | 六、八三八 | 一・八 | 一四、四四一 | 二・五 |
| 其他 | 一八、九二八 | 四・八 | 三五、八二五 | 六・七 | 二三、九一〇 | 五・二 | 三一、五七二 | 四・七 | 七、五八五 | 二・一 | 一三、六七七 | 二・二 |
| 合計 | 三九四、〇二七 | 一〇〇 | 五三五、九九九 | 一〇〇 | 四五七、四五八 | 一〇〇 | 六六八、六〇一 | 一〇〇 | 三六五、三一九 | 一〇〇 | 五八二、八二〇 | 一〇〇 |

| 昭和四年 |
| --- |
| 三九、〇一二 |
| 一五四、四八二 |
| 一八四、五三〇 |
| 九二、四八八 |
| 三一、五八二 |
| 六〇、九〇七 |
| 四三一、四九九 |
| 一八六、〇六二 |
| 二四五、四三七 |

註 1 は上陸數より貨車搭乘車數を控除したもの
2 は同地殘留者
3 は客車搭乘車と徒歩者の合算なり

右表に據り大連に於ける昭和四年度貨車搭乘者の前年に對する減少約六萬は客車及徒歩北行者の增加に非ずして殘留者の增加なることが判る。營口に於ては稍々之と反對の現象を呈せるも、其數僅少なるを以て合計に於ては入滿基地殘留者の增加を示すこと、なつた。出稼時期たる上半期に於ては此の傾向は一層著しきものがあつたと考へられる。

然して吾人は出來得るならば前掲客車搭乘者と徒歩者との合算中、兩者の占むる割合如何と云ふ問題に就いても、之を明白にし入滿基地に於ける勞力の需給考察に資したいのであるが、手許に推算の根據ともなるべきものが全然ない爲、困難な問題にして漸進的調査に俟つ外はない。從來は概略各半數宛を占むるものと看做されてゐた。

## 第二節 各地狀況

### 第一款 大連

一、上陸者數

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 昭和三年 | 一〇六、四二〇 | 四二、五八九 | 四一、二七六 | 一九〇、二八五 |
| 昭和四年 | 一五四、四八一 | 三一、五八一 | 三一、四一〇 | 二一七、四七二 |

註　昭和二三兩年度奉天數には瀋陽皇姑屯兩驛乘車數を加算せず

右の數字が果して同地に於ける正確なる殘留者なるかに就いては、猶徒步集中者の有無に就いての疑問が存すると雖も、歸還の場合は出稼の場合と異なり、概して經濟的に餘裕あるを以て徒步集中者は案外尠ないと見て差支へない。然して之を各經路別に見るに大連異常に多く、營口、奉天は入滿數に對照し頗る過少の觀あるは、前者は勞力需要の旺盛なるの一證左と見られ、後者は移民の通過地たることを說明する材料と謂へる。

### 第二項　客車搭乘者と徒步者

前二項に於て大連、營口の貨車搭乘者か明瞭となり、都市勞働者及附近村落の農業勞働者其の他として入滿咽喉地に止まるものが概略ではあるが求め得たとすれば、之を各地に於ける入滿數から控除することに據つて、客車搭乘者と徒步者の合計は得られる譯である。

| 經由地名 | 大連 | | | 營口 | | | 計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年次　種別 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 |
| 昭和二年 | 三二〇、一二八 | 九七、二八三 | 二二三、八四五 | 九四、六七一 | 二六、九五五 | 六七、七一六 | 四一四、七九九 | 一二四、二三八 | 二九一、五六一 |
| 昭和三年 | 二八〇、五五三 | 一〇六、四二〇 | 一七四、一三三 | 一〇二、一七七 | 四二、五一九 | 五九、六五八 | 三八二、七三〇 | 一四八、九三九 | 二三三、七九一 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 芝罘 | 六四、五三四 | 一九・三 | 一四三、五〇五 | 二三・九 | 六〇、七四三 | 一八・一 | 一〇一、六五四 | 二〇・一 | 六八、一四九 | 二一・二 | 一三四、七三六 | 二四・三 |
| 龍口 | 三四、五二五 | 一〇・三 | 五五、六八八 | 九・三 | 三七、五四八 | 一一・二 | 六四、八三五 | 一二・八 | 六一、九二三 | 一九・三 | 九二、一八三 | 一八・〇 |
| 天津 | 四〇、一三八 | 一二・〇 | 五三、七八六 | 九・〇 | 三四、五九三 | 一〇・三 | 四八、三三五 | 九・五 | 三七、〇九九 | 一一・六 | 四九、〇〇五 | 九・六 |
| 安東 | 三、一四九 | 〇・九 | 一〇、七一五 | 一・八 | 五、五〇四 | 一・六 | 一二、二三七 | 二・四 | 七、七五七 | 二・四 | 一七、五三三 | 三・四 |
| 其他諸港 | 一、二四六 | 〇・四 | 三、六七〇 | 〇・六 | 一、五七六 | 〇・五 | 四、一五八 | 〇・八 | 二、八九二 | 〇・九 | 六、六四〇 | 一・三 |
| 合計 | 三三三、六三二 | 一〇〇 | 五九九、四四二 | 一〇〇 | 三三五、七七六 | 一〇〇 | 五〇六、五五三 | 一〇〇 | 三二一、三三六 | 一〇〇 | 五一三、九四七 | 一〇〇 |

右の如く大連港上陸者を仕出港別に視るに、青島からの移民數は上半期比較に於いて前年に對し約五萬三千の著減を呈し、他の諸港よりの渡來者に之を補塡するだけの增加を來した。就中龍口の仕出數は前年三七五四八（一一・二％）に對し本年六一、九二三（一九・三％）にして殆ど倍加に近い激增である。之を全年數に見るも同樣に龍口芝罘の增加が注意を喚起する。斯くの如き本年大連港上陸者の仕出地別狀態の變化は、山東方面の事情を明瞭にするに非ざれば確かなる判斷は下し得ないが、想ふに時局漸定の影響として、比率上出稼移民激增以前の狀態を稍々恢復せるものにして、後揭上陸者中男子に對する女子入滿數の減少及歸還者數の增加と相俟つて、前兩年度に對し永住半永住的移民の低減、出稼者の增加を說明すべき資料と看做して差支へない。

## 三、貨車搭乘者の主要驛分布狀態

以上々陸者中貨車に依り滿鐵線主要各驛に分布する數は次表の如くである。

| 期別／年次 | 六月末迄 | 全 | 全年に對する六月迄の割合 |
|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 三三三、六三二 | 五九九、四五二 | 五五、七 |
| 昭和三年 | 三三五、七七六 | 五〇六、五五二 | 六六、二 |
| 昭和四年 | 三二一、一一六 | 五一二、九四七 | 六二、六 |

右に據れば昭和四年上半期に於ける上陸出稼移民數は前兩年に對し、夫々一萬五千足らずの減少にして特に說明を必要とする程の差異ではない。然して、全年數の最近三箇年の對照に於ては、昭和二年に對する同三、四兩年度の數は約九萬三千、八萬六千の減少にして、全年對上半期の比率に注目に値する變化を齎らした。之前章第三節第三項月別比較に於て叙述の如く時局收拾の及ぼせる影響とみるべきであらう。

## 二、仕出港別上陸數

出稼移民の分野を明瞭にせんが爲に前掲上陸數を仕出港別に見ること次の如くである。

最近三箇年大連上陸出稼移民仕出地別統計

| 年次／員數／仕出地 | 昭和二年 | | | | 昭和三年 | | | | 昭和四年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 靑島 | 一九〇、〇五〇 | 五七・〇 | 三三一、〇七八 | 五五・四 | 一九五、八二三 | 五八・三 | 二七五、三四四 | 五四・四 | 一四三、二九六 | 四四・六 | 三二二、八五〇 | 四三・四 |

て僅少の増加ありたるを除けば各驛こも減少を呈した。就中長春の約二萬二千、撫順の約五千は其の顯著なるものこ謂ふここが出來る。全年に於ける分布も殆ご之こ同樣である。

四、貨車搭乘者の上陸者に對する割合

以上一、三、揭載の數字に據つて貨車搭乘者の上陸者に對する割合を求めてみるに左の如くである。

| 種別＼年次 | 上陸者數 上半期 員數 | 上陸者數 上半期 % | 上陸者數 全年 員數 | 上陸者數 全年 % | 貨車搭乘數 上半期 員數 | 貨車搭乘數 上半期 % | 貨車搭乘數 全年 員數 | 貨車搭乘數 全年 % | 差引 上半期 員數 | 差引 上半期 % | 差引 全年 員數 | 差引 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 三三三、六三二 | 100 | 五九九、四五二 | 100 | 一六六、二三三 | 五〇 | 二七九、三二四 | 四七 | 一六七、三九九 | 五〇 | 三二〇、一二八 | 五三 |
| 昭和三年 | 三三五、七七六 | 100 | 五〇六、五五三 | 100 | 一七八、三六八 | 五三 | 二二六、〇〇〇 | 四五 | 一五七、四〇八 | 四七 | 二八〇、五五三 | 五五 |
| 昭和四年 | 三二一、一一六 | 100 | 五一二、九四七 | 100 | 一三四、六一六 | 四二 | 一七四、〇一六 | 三八 | 一八六、五〇〇 | 五八 | 三三八、九三一 | 六二 |

右表に據れば昭和四年は上半期に於いても全年に於ても著しき減少を來し、差引數は反對に著增するところこなつた。然して此の差引殘餘數の內容は客車搭乘者、徒步者大連市及附近村落殘留者なるも、遺憾乍ら三者の分野に就ては明確なる判斷を下すに足る材料が無い。

五、大連港乘船數こ大連驛下車數この比較

反對に歸還の場合に於ける大連港乘船數こ大連驛下車數の差引を見るに次の如くである。

## 最近三箇年大連驛乘者出稼移民仕向驛別統計

| 仕向驛　員數　年次 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鞍山 | 二、四四四 | 一・五 | 八、四〇二 | 三・一 | 二、四四八 | 一・五 | 六、一一三 | 二・七 | 三、六二六 | 二・七 | 六、二四七 | 三・六 |
| 奉天 | 三四、八六八 | 二一・七 | 五七、六二四 | 二〇・六 | 三六、三三三 | 二二・七 | 四八、〇三五 | 二一・三 | 三六、三七九 | 二七・〇 | 四八、九二七 | 二八・一 |
| 鐵嶺 | 一、四〇七 | 〇・八 | 二、一八二 | 〇・八 | 一、四九七 | 〇・九 | 二、二五八 | 一・〇 | 一、一三〇 | 〇・八 | 一、七三三 | 一・〇 |
| 開原 | 一一、二〇三 | 七・〇 | 一七、七二六 | 六・三 | 五、五一七 | 三・五 | 七、五八三 | 三・四 | 四、六三六 | 三・四 | 六、一〇八 | 三・五 |
| 四平街 | 二、七三七 | 一・七 | 六、一一三 | 二・二 | 四、〇三七 | 二・五 | 五、〇七六 | 二・二 | 四、〇三三 | 三・〇 | 四、八八二 | 二・八 |
| 公主嶺 | 一、九二九 | 一・二 | 三、〇七二 | 一・一 | 二、一一三 | 一・三 | 二、七八六 | 一・二 | 二、九七一 | 二・二 | 三、五三八 | 二・〇 |
| 長春 | 八〇、四六三 | 五〇・〇 | 一二六、六八五 | 四五・四 | 八九、八三九 | 五六・三 | 一一一、三五〇 | 四九・三 | 六七、八六七 | 五〇・四 | 八四、四三一 | 四八・五 |
| 撫順 | 二四、六三〇 | 一五・三 | 四二、五八六 | 一五・二 | 一七、八二九 | 一一・三 | 二三、八八二 | 一〇・六 | 一二、四一一 | 九・二 | 一六、一一七 | 九・五 |
| 其他 | 一、〇六二 | 〇・七 | 一四、九二六 | 五・三 | 三九 | — | 一八、九〇七 | 八・三 | 一、五七三 | 一・二 | 一、九七三 | 一・〇 |
| 合計 | 一六〇、七四三 | 100 | 二七九、三三四 | 100 | 一五九、五五二 | 100 | 二二六、〇〇〇 | 100 | 一三四、六一六 | 100 | 一七四、〇一六 | 100 |

註　昭和二、三兩年度上半期數字には行先地不明の無賃乘車數を省略せり。

貨車搭乘者の昭和四年度上半期合計は一三四、六一六にして註記の無賃輸送を加算したる三年度貨車搭乘者數一七八、三六八に比較すれば四三、七五二の著減にして、隨つて各驛の分布數も、鞍山、奉天、公主嶺の三地に極め

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 水産業 | — | — | 五八五 | 〇・一 |
| 礦山業 | 一八、七一六 | 三・五 | 四、〇二九 | 〇・八 |
| 工業 | 七、七〇〇 | 一・五 | 一一、一三八 | 二・一 |
| 商業 | 一四、二一六 | 二・七 | 一四、二三五 | 二・七 |
| 交通業 | 四、八七六 | 〇・九 | 三、八〇七 | 〇・七 |
| 公務自由業 | 九、三四八 | 一・七 | 一〇、〇六三 | 一・九 |
| 其他自由業 | 三四二、九八〇 | 六四・二 | 三七〇、一〇九 | 七〇・二 |
| 家事使用人 | 五、五五二 | 一・〇 | 三、八七一 | 〇・七 |
| 無職業者 | 四、八二一 | 〇・九 | 三、八七四 | 〇・七 |
| 合計 | 五三四、三六一 | 一〇〇 | 五二七、七七〇 | 一〇〇 |

註　本表數字は大連港上陸の各等船客にして出稼移民のみではない。

即ち昭和三年大連港上陸支那人船客の八七、八％は自由業者、農業從事者即ち苦力及び農民之を占め、同四年に於いて占むる農民、苦力の比率も九〇・三％の高率である。斯の如き比率は恐らく避難民及出稼者の殺到後、即ち昭和二年度後の現象であらうと想像し得られるが、從來に於いても相當の高率を維持してゐたことは、農業其他原始産業を基本とする滿蒙の經濟狀態を一瞥すれば容易に首肯し得るところである。然して昭和三年全年の數字と四年上半期數とを比較してみるに比率に於て其他自由業者は三年六四・二％なるに對し、四年七〇・二％にして約六％の增加を示し、農民は四年二〇・一％にして三年の二三・六％に比し、三・五％減少を示した。之既述貨車搭乘者減少

| 年次 | 乘船數 | 下車數 員數 | 下車數 % | 差引數 員 | 差引數 % |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 一四一、八五九 | 四四、五七五 | 一四・二 | 九七、二八三 | 八五・八 |
| 昭和三年 | 一六八、五三〇 | 六二、一一〇 | 三六・九 | 一〇六、四二〇 | 六三・一 |
| 昭和四年 | 二一九、二九三 | 七四、九九三 | | 一四四、三〇〇 | |

本年の如きは乘船數は下車數の三倍以上に達し、其の差異約十五萬四千にして、前年に比し約五萬の增加を呈した。歸還の場合に徒步南下するもの、極微の數なることは、出稼に依り經濟的に多少の餘裕を得たこと認むべきことに依り、容易に想像し得る。然らば大連驛下車數を除く乘船數約十五萬は大連市居住のものこ、徒步にて容易に大連に出られる範圍の附近村落のものなりこ稱し得る、

六、上陸各等支那人船客の職業別

次に上陸者の質的變化を見る爲に職業別に觀察を試みる。

大連港上陸支那人船客職業別統計

| 職業別＼年次 | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|
| 農業 | 一二六、一五二 | 三三・六 | 一〇六、〇五九 | 二〇・一 |

最近三箇年仕向地別歸還數（大連）

| 年次／仕向地別 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 青島 | 三七、〇六八 | 二六・一 | 七二、八三七 | 四三・二 | 九〇、四二三 | 四一・二 |
| 芝罘 | 四九、五二六 | 三四・九 | 四二、三五五 | 二五・一 | 五八、八七一 | 二六・八 |
| 龍口 | 二八、二二七 | 二〇・〇 | 三三、九四二 | 二〇・一 | 四四、五六三 | 二〇・三 |
| 天津 | 一二、四〇〇 | 八・七 | 一五、一〇〇 | 九・〇 | 一六、三三七 | 七・五 |
| 安東 | 五、三三一 | 三・八 | 三、六七三 | 二・一 | 七、〇一三 | 三・二 |
| 其他諸港 | 九、三〇七 | 六・六 | 六二三 | 〇・五 | 二、〇八六 | 一・〇 |
| 合計 | 一四一、八五九 | 一〇〇 | 一六八、五三〇 | 一〇〇 | 二一九、二九三 | 一〇〇 |

右表に據る本年度離滿者の增加は昭和二年に對し約八萬、同三年に對し約五萬にして、其の結果各港別に見る仕向數も凡べて增加を呈せるも、就中青島は出稼者激增年度に於いて芝罘、の次位にあつたが翌年から首位を占め出稼の場合こ全く反對の現象を呈し、本年は特に芝罘、龍口この差異を引離したここが窺知される。右は明に動亂の爲同地方から滿洲に避難した住民の多數が歸還せるものこ看做して差支へあるまい。

## 第二款　營口

並に其の移動に北行率減退の傾向を呈せることが、入滿者の質的變化の影響なることを說明する好資料である。

## 七、上陸者の男女別

上陸者の男女別の統計も職業別的統計及仕出地別統計同樣、渡來者の質的變化即ち移住力の大小、勞働力の大小如何觀察の上に有力なる資料である。

大連港上陸者男女別統計

| 年次／男女別 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 二七五、八二四 | 八二・七 | 四八一、〇三一 | 八〇・二 | 二七八、七六四 | 八三・〇 | 四一八、九六〇 | 八二・七 | 二六七、五七一 | 八三・三 | 四五三、七七七 | 八四・六 |
| 女 | 五七、七八五 | 一七・三 | 一一八、四二一 | 一九・八 | 五六、九九二 | 一七・〇 | 八七・五九三 | 一七・三 | 五三、五四五 | 一六・七 | 七九、一七〇 | 一五・四 |
| 計 | 三三三、六〇九 | 100 | 五九九、四五二 | 100 | 三三五、七五六 | 100 | 五〇六、五五三 | 100 | 三二一、一一六 | 100 | 五三二、九四七 | 100 |

出稼移民の中に目に立つ程の婦女子が參加しだしたのは避難移民激增の昭和二年からのことであつて爾今時局の漸定に伴れて次第に減少を呈せるは明らかに避難民及永住者半永住者の減少、出稼者の增加を指示するものである。

## 八、歸還者の仕向港別比較

更に本年乘船者の仕出地別觀察を試むるに次の如き變化が認められる。

右上陸者を仕出港別に表示して敍上の消息を明瞭にするに資すれば次の如くである。

營口上陸者仕出地別統計

| 年次／仕出地 | 昭和二年 | | | | 昭和三年 | | | | 昭和四年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 青島 | 五三三 | 一 | 二、二四八 | 一・五 | 一、三〇〇 | 二・一 | 一、三七四 | 〇・九 | 一、七八〇 | 二・三 | 二、五四一 | 一・七 |
| 芝罘 | 三五七 | — | 九三三 | 〇・六 | 五七四 | 〇・九 | 九八二 | 〇・六 | 五〇 | — | 三一〇 | 〇・二 |
| 龍口 | 一九、九六七 | 三二 | 四五、〇七一 | 二九・三 | 二二、四五九 | 三六・六 | 五〇、九五八 | 三三・四 | 二四、七七三 | 三一・三 | 四七、五三三 | 三二・〇 |
| 天津 | 四〇、〇八八 | 六三 | 一〇〇、三一〇 | 六五・二 | 三七、〇八九 | 六〇・四 | 九六、八五四 | 六三・五 | 四七、三三〇 | 五九・八 | 八九、七五九 | 六〇・四 |
| 其他諸港 | 二、三八二 | 四 | 五、二一九 | 三・四 | — | — | 二、三八八 | 一・六 | 五、一六五 | 六・六 | 八、四三五 | 五・七 |
| 合計 | 六三、三二九 | 一〇〇 | 一五三、七七一 | 一〇〇 | 六一、四二二 | 一〇〇 | 一五二、五五六 | 一〇〇 | 七九、〇九八 | 一〇〇 | 一四八、五七七 | 一〇〇 |

即ち上半期の比較に於ける四年度の三年度に對する增加は殆んど天津からの渡來者にして約一萬を算し、其他諸港よりの增加は約三千にして之に次ぎ、龍口の增加は約二千である。然し全年に於いては其他諸港を除けば何れも前年に對し減少し、他の入滿咽喉地の趨勢と合致するを見る。

## 三、貨車搭乘者の主要驛分布

營口驛貨車搭乘の出稼移民を主要驛別に表示して其の分布狀態を見れば次の如くである。

一、上陸者數

| 年次＼期別 | 上半期 海關報告數 | 上半期 推定數 | 全年 海關報告數 | 全年 推定數 | 上半期の全年に對する割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 六三、三二九 | 八一、〇四八 | 一四八、五五二 | 一九〇、二四七 | 四二・六% |
| 昭和三年 | 六一、四二三 | 七八、六二〇 | 一五二、五五六 | 一九五、二七二 | 四〇・三 |
| 昭和四年 | 七九、〇九八 | 一〇一、二四五 | 一四八、五七七 | 一九〇、二七九 | 五三・二 |

註　推定數は大連港最近三箇年の海關報告數に對する上陸出稼移民數の平均超過率二八%に根據して計算したものである。

右表に指示せらるゝが如く、昭和四年上半期に於ける上陸數は激增年度たる前二年に對し、更に異數の增加を示した。此の著增の理由は入滿に當り京奉線經路並に本經路利用を比較的便宜と認むる河南、直隷方面からの避難民が渡來したに基因する。避難の原因は例に依つて饑饉と戰禍に脅威を感じ離鄕の決心に出てたに外ならぬ。故に急を告げんとして終に進展を見なかつた時局が小康を保持せる下半期に於いては、渦中にある省民を日和見的境地に立たしめたと見るべきか、移民は激減して、結局全年の比較に於ては、却て昭和三年度よりも數千の減少をみるに至つた。之れ亦從來遼河の開河が三月末なる爲、出稼時期なる上半期の全年に對する割合が大連の如く高率ならざりしにも拘らず、四年度は殆ど同率に近い異例を示した所以である。

二、出稼者の仕出港別比較

ても殆ど之と軌を一つにするを見る。

四、貨車搭乘者の上陸者に對する比率

上記一、及三の比較に依つて上陸者に對する貨車搭乘者の割合を求むる。

| 種別 | 上陸者數 | | | | 貨車搭乘者數 | | | | 差引 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 期別 | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| 年次　員數 | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 昭和二年 | 八一、〇四八 | 一〇〇 | 一九〇、一四七 | 一〇〇 | 六五、二七八 | 八〇・五 | 九五、四七六 | 五〇・二 | 一五、七七〇 | 一九・五 | 九四、六七一 | 四九・八 |
| 昭和三年 | 七六、六三〇 | 一〇〇 | 一九五、二七二 | 一〇〇 | 五三、一二四 | 七〇・〇 | 九三、〇九五 | 四七・七 | 二三、五〇六 | 三〇・〇 | 一〇二、一七七 | 五二・三 |
| 昭和四年 | 一〇一、二四五 | 一〇〇 | 一九〇、二七九 | 一〇〇 | 六〇、六二九 | 五九・九 | 九七、八三一 | 五一・四 | 四〇、六一六 | 四〇・一 | 九二、四四八 | 四八・六 |

即ち上半期に於ける貨車搭乘者の上陸者に對する割合は昭和二年八〇・五%、同三年七〇%、同四年五九・九%と次第に低減の傾向あるも尙大連の二年五〇%、三年五三%、四年四二%なるに比ぶれば遙に高率にある。昭和二年度に於ける高率は瀋海、吉敦線工事用として纒つた數の團體輸送が行はれたるに因り、同四年度の殘留者の著增は、河北驛より北寧線に出で更に打通線に轉乘して北行したもの丶數が、從來になく巨數を算したることに依るもの丶如く考へられる。

（註、營口地方事務所の報告に據れば本年全年の上陸者約十五萬と認め滿鐵線利用者約十萬を差引たる殘留者の中約四萬五千が河

| 仕向驛 \ 員數 \ 期別 \ 年次 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 奉天 | 二五、三七九 | 三九 | 三九、〇七四 | 三四・〇 | 一三、一九七 | 二三 | 二二、七七六 | 二四・五 | 一四、七九四 | 二四 | 二八、三八四 | 二九・〇 |
| 鐵嶺 | 二八八 | — | 九七六 | 〇・八 | 二三八 | 一 | 七二四 | 〇・八 | 四〇四 | 一 | 八八八 | 〇・九 |
| 開原 | 一、二一三 | 二 | 三、五九九 | 三・一 | 六九八 | 一 | 二、〇三九 | 二・二 | 一、〇九八 | 二 | 二、二九五 | 二・三 |
| 四平街 | 七〇〇 | 一 | 一、七八二 | 一・六 | 九〇四 | 二 | 一、七四二 | 一・九 | 五、一六五 | 九 | 八、五二一 | 八・七 |
| 公主嶺 | 五一三 | 一 | 一、七三七 | 一・五 | 四九六 | 一 | 一、三三七 | 一・四 | 一、一〇五 | 二 | 一、八一七 | 一・九 |
| 長春 | 三四、四〇七 | 五三 | 五九、四八五 | 五一・八 | 三六、〇二四 | 六五 | 五七、三六三 | 六一・六 | 三〇、五四八 | 五〇 | 四六、一六一 | 四七・二 |
| 撫順 | 二、一八八 | 三 | 六、三九五 | 五・六 | 三、八九二 | 七 | 五、六二〇 | 六・〇 | 五、一一七 | 八 | 六、八七二 | 七・〇 |
| 其他 | 五八八 | 一 | 一、八六八 | 一・六 | 六六五 | 一 | 一、五二四 | 一・六 | 二、三九八 | 四 | 二、九〇三 | 三・〇 |
| 合計 | 六五、二七八 | 100 | 一一四、九一六 | 100 | 五五、一一四 | 100 | 九三、〇九五 | 100 | 六〇、六二九 | 100 | 九七、八三二 | 100 |

即ち右三箇年の統計に據れば四年上半期は前年に對する約五千五百名の增加ありたるに依り、各主要驛別に見ても長春の減少を例外とし、他は悉く增加を呈した。就中四平街向の前兩年度に對する增加は注目に値する。其他各驛向の數も其內容は四平街經由の四洮線連絡者が大部を占むるに依つて想へば、此の著增は長春驛向數の減少に關聯あるは勿論、既述上半期營口上陸者の增加とも何等かの連絡あるを想はしむるものである。又全年の分布に於い

右の如く乘船數、下車數及差引數の三者共昭和三年度が最も多く、四年度は前年に比し稍減少を呈した。即ち營口に於ても其の相違は大連の如く巨數ならざるも同樣に乘船數が下車數を超過し、營口並に其の附近村落に約三萬内外の殘留者あることを說明する。

### 六、歸還者の仕向港別比較

本年度營口より乘船離滿した移民を、前兩年度と仕出地別に對照表示すれば次の如くである。

最近三箇年仕向地別歸還數（營口）

| 仕向地別＼年次 | 昭和二年 員者 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 青島 | 四〇四 | 〇・六 | 一五九 | 〇・三 | 二四四 | 〇・三 |
| 芝罘 | 五〇一 | 〇・八 | 一、〇三四 | 一・〇 | 四七一 | 〇・六 |
| 龍口 | 二六、一六五 | 四一・八 | 三一、三六六 | 三一・八 | 三四、六二七 | 四三・九 |
| 天津 | 三一、九四六 | 五一・〇 | 六三、九九七 | 六四・八 | 四一、一七九 | 五二・二 |
| 大連 | — | — | — | — | 四四〇 | 〇・六 |
| 其他諸港 | 三、六二七 | 五・八 | 二、一一四 | 二・一 | 一、八九三 | 二・四 |
| 合計 | 六二、六四三 | 一〇〇 | 九八、六七〇 | 一〇〇 | 七八、八五四 | 一〇〇 |

右に據れば本年度營口乘船數は大連と異なり、却つて前年に對し減少を呈した。此の現象は仕向地別觀察に依り

北線より北寧線を利用したるものと認めてゐる）

其の何れにもせよ上半期に於ける營口上陸者には從來殘留者及徒歩北行者は極めて尠かつたと稱し得る。併し乍ら全年に於いては上陸者の約半數の差引數を見、客車搭乘者及徒歩者を考慮しても相當の殘留者あることが判る。此の間の事情は全年推定數に誤りなくば營口及其の附近の各種勞働者は比較的出稼時期が遲るゝものなることに歸着せねばならない。

五、乘船數と下車數との比較

歸還の場合に於ける下車數と乘船數との差引增減は下車數の乘船數に超過する場合は同地方民の北方出稼あることを指示し、乘船數の超過は大體に於いて直魯兩省移民にして同地に出稼せるものゝあることを說明するものである。斯の如き見地の下に最近三箇年の下車數と乘船數との比較を試みる。

最近三箇年下車數と乘船數との比較

| 種別／年次 | 乘船數 | | 下車數 | | 差引 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 昭和二年 | 六二、四六三 | 一〇〇 | 三五、五〇八 | 五六・八 | 二六、九五五 | 四三・二 |
| 昭和三年 | 九八、六七〇 | 一〇〇 | 五六、〇八一 | 五六・八 | 四二、五八九 | 四三・二 |
| 昭和四年 | 七八、八五四 | 一〇〇 | 四九、一〇〇 | 六二・三 | 二九、七五四 | 三七・七 |

一、上陸者數

最近三ヶ年安東上陸者を表示すれば次の如くである。

| 年次／期別 | 上半期 | | 全年 | | 全年に對する上半期の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 支那人船客 | 出稼移民 | 支那人船客 | 出稼移民 | |
| 昭和二年 | 二九、五七五 | 二三、六六〇 | 七八、八七九 | 五五、二一五 | 四二・九 |
| 昭和三年 | 二五、九九〇 | 二〇、七九二 | 五二、七〇三 | 三六、八九一 | 五六・四 |
| 昭和四年 | 二四、二七五 | 一九、四一九 | 五三、五五七 | 三七、四九〇 | 五一・七 |

註　出稼移民欄數字は支那人船客に對し上半期八割、全年七割を占むるものとして推算したものである。

四年度上陸者は上半期に於いて前年度よりも少數の減少を呈し、全年に於いては少數の增加を呈したが、ともに其の差異は極めて尠ない。上半期の全年に對する割合は營口と同樣大連に比して低率なるも、鴨綠江の開河が三月末に因るものである。

二、上陸者の仕出地別比較

右上陸者を仕向地別に吟味してみると上陸者の總數には大した差異を認めざるも、仕出地別に可成な變化が窺はれる。

最近三箇年安東上陸支那人船客仕出地別統計

明白なるが如く、主として天津港の增減に基因するものにして、天津仕向の前年度增加は、時局の爲北寧線輸送能力に障碍があり、河北省及山東省西南地方歸還者をして、營口乘船天津上陸の歸還經路を辿らしめたものと看做して差支へあるまい。

### 七、營口に於ける主なる勞働者數

前述殘留者の過少なる理由を說明する資料として、營口の主要勞働者を列擧する。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 各油坊苦力 | 約一千名 | 石炭苦力（鐵道） | 約五百名乃至千三百名 |
| 各商店雜穀其他仲仕 | 約一千二百名 | 同（北票） | 約百五十名乃至三百名 |
| 人力車夫 | 約一千二百名 | 東亞煙草男女工 | 約一千名 |
| 乘合馬車夫 | 約四百名 | 各燐寸會社 | 約二百三十名 |
| 荷馬車夫 | 約三百名 | 鹽田使用者 | 約二千九百名 |
| 埠頭苦力 | 約四百名 | 其他各工場 | 約二千名 |
| 合計 | 約一萬二千乃至一萬三千名 | | |

右の內國際運輸、福昌公司の多忙時に大連方面より一時的に補給するを除けば、他は悉く當地方に永住するものにして、新入出稼者の割込む餘地は皆無の狀態に在る。（營口地方事務所報告）

## 第三款　安東

地寄航の移民の増減にまで言及することは當らない。

## 三、客車搭乘者の主要驛分布狀態

### 最近三箇年客車搭乘者仕向驛別統計

| 年次 / 期別 / 仕向驛 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鞍山 | 二四 | — | — | — | 一五 | — | 一五 | 〇・一 | 一〇 | — | 二五 | 〇・二 |
| 奉天 | 三、一七四 | 二九 | — | — | 二、五九四 | 二四 | 三、一五一 | 二三・一 | 一、六七一 | 二三 | 二、八一八 | 二五・二 |
| 鐵嶺 | 八九 | 一 | — | — | 一一五 | 一 | 一一五 | 〇・八 | 五三 | 一 | 九〇 | 〇・八 |
| 開原 | 三二七 | 三 | — | — | 二四〇 | 二 | 二四〇 | 一・八 | 七七 | 一 | 一七六 | 一・六 |
| 四平街 | 二六三 | 二 | — | — | 二四二 | 二 | 二四二 | 一・八 | 一四七 | 二 | 二四二 | 二・二 |
| 公主嶺 | 三三 | — | — | — | 三 | — | 三 | — | — | — | — | — |
| 長春 | 五、八八八 | 五三 | — | — | 六、七一九 | 六一 | 七、〇三五 | 五一・七 | 四、〇一三 | 五六 | 五、〇八五 | 四五・五 |
| 撫順 | 七三六 | 七 | — | — | 五八七 | 五 | 五八七 | 四・三 | 六〇七 | 九 | 一、六二九 | 一四・六 |
| 本溪湖 | — | — | — | — | 二〇九 | 二 | 一、〇七五 | 七・九 | 二三四 | 三 | 四八八 | 四・四 |
| 其他 | 四五五 | 四 | — | — | 三二一 | 三 | 一、一四七 | 八・四 | 三五三 | 五 | 六二〇 | 五・五 |
| 合計 | 一〇、九九八 | 100 | — | — | 一一、〇三五 | 100 | 一三、六一〇 | 100 | 七、一六四 | 100 | 一一、一七三 | 100 |

| 仕出港別＼年次期別 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青島 | 一一、九七八 | 四〇・五 | ― | ― | 五、八二五 | 二二・四 | 一一、五七九 | 二一・九 | 七、七七〇 | 三二・〇 | 一四、三三七 | 二六・八 |
| 芝罘 | 一〇、一五八 | 三四・三 | ― | ― | 一三、一一三 | 五〇・五 | 二五、七〇二 | 四八・六 | 六、六七五 | 二七・五 | 一九、八二四 | 三七・〇 |
| 龍口 | 一、三〇六 | 四・四 | ― | ― | 一、七六三 | 六・八 | 三、六八一 | 七・〇 | 二、二七八 | 九・四 | 四、一七六 | 七・八 |
| 天津 | 二、三一八 | 七・八 | ― | ― | 二、三六八 | 九・一 | 三、〇四七 | 五・八 | 二、二八九 | 九・四 | 三、二三九 | 六・〇 |
| 大連 | 三、八一五 | 一二・九 | ― | ― | 二、八三六 | 一〇・九 | 八、四七三 | 一六・一 | 四、六四六 | 一九・一 | 一〇、七六九 | 二〇・一 |
| 其他 | ― | ― | ― | ― | 七五 | 〇・三 | 二一三 | 〇・四 | 六二六 | 二・六 | 一、二〇二 | 二・三 |
| 合計 | 二九、五五五 | 一〇〇 | 六六、八七九 | ― | 二五、九九〇 | 一〇〇 | 五二、七〇三 | 一〇〇 | 二四、二七四 | 一〇〇 | 五三、五四七 | 一〇〇 |

註　昭和二年全年仕出地別數字不明に就き省略す。

即ち右表に據れば四年度上半期に於ける芝罘よりの來航者は六、六七五は前年の同期一三、一一三に對し約半減し、其の結果再び青島、芝罘の關係を二年度に復歸せしめたるも、全年を通じて見るときは其の比率に於いて前年の如くならざるも芝罘依然として第一位にある。之に據つて想ふに仕出地の事情の如何に據つて移動の時期に遲速があり、本年の如きは芝罘方面からの安東上陸者は一般に遲かつたものである。猶大連港よりの渡來者が年々增加せるは、大連港に一時上陸したるものの再移動あるを除き、兩港の經濟的關係に因る往復船客あるを以て、直に同

住者の移動と看做すべきものである。然して本年度の汽車に依る北上者の減退の原因も、昭和二年秋季から同地方を襲ふた飢饉並に同時に起つて翌年出稼時季まで跋扈した大刀會の地方擾亂に依り、同地方進入の困難なるを感じ、上陸者の一部が當初の目的を變更して北滿へ進行したる結果として增加を齎らした、前年度の特異的な現象に歸すべきで、此の間の消息は前掲の主要驛別總計表昭和三年度に於ける長春著數の高率なることがよく說明してゐる。

以上に據つて本年安東より鴨綠江上流地帶に進入せるものは上半期約一萬五千ぐらいの見當だと思はれる。

## 五、乘船離滿數の仕出地別比較

次に安東より乘船歸還するところの移民に就いて仕出地別に比較を試みる。

最近三箇年仕向地別歸還數（安東）

| 年次／仕向地名 | 昭和二年 員數 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 青島 | － | － | 九、二二三 | 三三・四 | 一三、〇四九 | 三八・三 |
| 芝罘 | － | － | 一一、三五〇 | 四一・一 | 一二、五二四 | 三六・六 |
| 龍口 | － | － | 三、七九五 | 一三・七 | 四、〇一六 | 一一・八 |
| 天津 | － | － | 一、八七〇 | 六・八 | 三、一五三 | 九・二 |
| 大連 | － | － | 一、三六一 | 四・九 | 一、二九一 | 三・八 |
| 其他諸港 | － | － | 二五 | 〇・一 | 一四五 | 〇・四 |
| 合計 | 二九、九〇六 | － | 二七、六三四 | 一〇〇 | 三四、一七八 | 一〇〇 |

註　昭和二年全年推定數を缺く。

右表の指示に隨へば本年上半期は合計に於て前年に比し、約四千の減少にして、各驛の分布數は撫順に僅少の增加ありたるを例外とし、長春の約二千七百の減少を筆頭として各驛とも減少を呈した。隨つて比率に於ても長春、撫順に多少の變化を認むるも、總括的に觀れば大した變りはない、然して全年の分布數に至つては撫順、奉天の比率的增加、長春、本溪湖の減少が注意を惹く。

四、客車搭乘者の上陸者に對する割合

上記一、三に依り出稼時期たる上半期のみに就き客車搭乘者の上陸者に對する割合を求むるに次の如くである。

| 種別／年次 | 上陸者數 員數 | 上陸者數 % | 客車搭乘者 員數 | 客車搭乘者 % | 差引數 員數 | 差引數 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和二年 | 二三、六六〇 | 一〇〇 | 一〇、九九八 | 四七 | 一二、六六二 | 五三 |
| 昭和三年 | 二〇、七九二 | 一〇〇 | 一一、〇四五 | 五三 | 九、七四七 | 四七 |
| 昭和四年 | 一九、四一九 | 一〇〇 | 七、一六四 | 三一 | 一二、二五五 | 六九 |

註　全年數字不完全なるを以て上半期數のみ採用して比較した。

即ち三箇年とも客車搭乘車は上陸者に比し極めて尠なく、殘留者の高率なることは遙に大連を凌駕する。之安東は大連、營口と異なり、鴨綠江上流沿岸地方の未開地を控へ、同港上陸者も當初より此の未開拓地に徒步進入の目的を以て出稼せるものなるに因るものであつて、故に右表示の客車搭乘者なるものは上陸者と殆ど關係なき同地方原

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 營口 | 二五、三七九 | 八・七 | — | — | 一二、一九七 | 四・〇 | 二二、七七六 | 五・二 | 一四、七九四 | 五・八 | 二八、三八四 | 六・九 |
| 安東 | 三、一七四 | 一・一 | — | — | 二、五九四 | 〇・八 | 三、一五一 | 〇・七 | 一、六七一 | 〇・七 | 二、八一八 | 〇・七 |
| 北寧線 | 二二九、七五〇 | 七八・四 | — | — | 二五五、五六四 | 八三・四 | 三六二、六五五 | 八三・一 | 二〇〇、八八〇 | 七九・二 | 三三一、二一〇 | 八〇・五 |
| 合計 | 二九三、一一七 | 100 | — | — | 三〇六、五八七 | 100 | 四三六、六一七 | 100 | 二五三、七二四 | 100 | 四一一、三三九 | 100 |

註　昭和四年度北寧線下車數は奉天皇姑屯瀋陽三驛の合計にして、二、三兩年度に於ては、奉天驛下車數を基本とし奉天一〇、他線六の割合で計算せるものである。

右に據れば本年度出稼移民の奉天到著數は上半期約二十五萬、全年約四十一萬であり、前年に對し、上半期約五萬三千の減少、全年約二萬五千の減少である。併し乍ら北寧線關係の奉天到著數は極めて薄弱なる根據の下に推定せらるゝが故に、之を比較的信憑に足ると稱せらるゝ後掲滿鐵線奉天驛乘車數を藉りて其の推算に誤り無きかに就いて檢討を試みる。即ち奉天驛搭乘移民數の四年度に對する減少は上半期、全年とも約五萬であり、又奉天地方事務所の報告にも、比類なき銀價の暴落に崇られた奉天の經濟界は都市勞働者としての出稼移民に對する包容力の激減を來し、事實出稼移民中奉天に殘留したるものは其の影響を免れずして、前年に比し遙に減退したことが傳へられ、又奧地奉海線方面の情報にも同地方進入者の遞減したることを報じてゐる。故に之等の資料の綜合からは北寧線奉天到著數は前掲昭和三年度數より約五萬を差引いた上半期約二十萬、全年約二十九萬と云ふ數よりも、猶少數なるべきが、至當の如く考へられるのであるが、暫らく本數を以て本年度北寧線奉天到著數とする。

註　昭和二年は仕向地別數を欠ぐ。

安東よりの本年度歸還數は前年より幾らか增加を呈し、仕出港別比較に於ても、青島稍々增加を來し、殆ご大連こ傾向を同じうするが故に、先づ青島の增加は大體兩年に於いて安東附近並鴨綠江上流地方に堆積した、出稼者及び避難が時局の小康により歸還したこ見るべきであらう。

## 第四欵　奉　天

### 一、到　著　數

奉天が出稼移民移動の十字路こして其の移動が他地に比較して錯雜極まりなきものなるここは今更繰返し言を弄するの要を認めぬ。大連、營口よりの客車搭乘移民中奉天驛に下車するもの、同地よりの徒步者にして一時奉天に腰を据えるもの等の數は全然不明であり、又北寧線關係の數字も相變らず確數を得るここ困難である。數字の檢討は後廻しこし、明瞭なる範圍内に於て到著數を見る爲に先づ各經路別に奉天下車數を表示する。

| 年次 / 期 / 仕出驛別 | 昭和二年 上半期 員數 | 昭和二年 上半期 % | 昭和二年 全年 員數 | 昭和二年 全年 % | 昭和三年 上半期 員數 | 昭和三年 上半期 % | 昭和三年 全年 員數 | 昭和三年 全年 % | 昭和四年 上半期 員數 | 昭和四年 上半期 % | 昭和四年 全年 員數 | 昭和四年 全年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 三四、八六八 | 一一・九 | — | — | 三六、一三三 | 一一・八 | 四八、〇三五 | 一一・〇 | 三六、三七九 | 一四・三 | 四八、九二七 | 一一・九 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 撫順 | 一五、一三七 | 一〇・一 | — | — | 三〇、四三四 | 一四・三 | 五七、二二八 | 一七・〇 | 二三、〇八一 | 一四・二 | 四六、二三九 | 一五・四 |
| 其他 | 一〇、〇一四 | 六・七 | — | — | 四、〇六九 | 一・九 | 九、九七五 | 三・〇 | 三、二六一 | 二・〇 | 七、一八一 | 二・四 |
| 合計 | 一五〇、二〇一 | 一〇〇 | — | — | 二一二、九三一 | 一〇〇 | 三三五、八九六 | 一〇〇 | 一六二、九一〇 | 一〇〇 | 二九九、八〇〇 | 一〇〇 |

註　昭和二年全年數字は不明なるを以て計上せず。

## 三、奉天及其の附近定著者

奉天及其の附近への出稼移民及定著者を窮める爲に叙上の到著數を藉りることゝする。

| 種別＼年次 | 到著數 | | | | 滿鐵線乘車數 | | | | 差引數 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| 昭和二年 | 二九三、一七一 | 一〇〇 | — | — | 一五〇、二〇一 | 五一 | — | — | 一四二、九七〇 | 四八 | — | — |
| 昭和三年 | 三〇六、五八七 | 一〇〇 | 四三六、六一七 | 一〇〇 | 二一二、九三一 | 六九 | 三三五、八九六 | 七七 | 九三、六五六 | 三一 | 一〇〇、七二一 | 二三 |
| 昭和四年 | 二五二、八四四 | 一〇〇 | 三八九、六三九 | 一〇〇 | 一六二、九一〇 | 六四 | 二九九、八〇〇 | 七七 | 八九、九三四 | 三六 | 八九、八三九 | 二三 |

註　本表到著數欄には大連、營口方面からの客車搭乘者、徒歩到著數が含まれてゐない。

即ち右表の指示するところの昭和四年度差引殘留者は上半期約九萬、全年約八萬九千にして、殆ど前年と差異が無いと云つてよい。右表には註記の如き事情あるを以て、之を考慮すれば、右差引殘留數はもつと多數となるべきであるが、實際殘留者は本數から、瀋海線轉乘者並徒歩奥地進入者を控除することに據つて得られる譯で、約四、

## 二、奉天驛乘車出稼移民の分布狀態

次表の指示する乘車數の前年に對する減少は上半期五〇、〇二一全年四九、八九五にして約五萬である。隨つて各主要驛の分布數も悉く遞減を呈した。就中長春の減少は他の海港に於ける分布狀況と其の軌を一にし、注意を惹くが、前年までは黑龍江省齊々哈爾方面進入者も、殆ど全部奉天より長春哈爾賓を經由して北行を企てたるも、本年は打通線轉乘者が目立つて增加した爲、因つて受けた影響も決して尠なしとしない。

客車搭乘出稼移民の仕向驛別統計

| 年次 | 昭和二年 | | | | 昭和三年 | | | | 昭和四年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 期別 | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | | 上半期 | | 全年 | |
| 仕向驛 | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 鞍山 | 八〇四 | 〇・五 | — | — | 二、三四三 | 一・〇 | 四、七四五 | 一・四 | 二、一四七 | 一・三 | 四、六二六 | 一・五 |
| 本溪湖 | — | — | — | — | 八、八二六 | 二・一 | 一三、五八九 | 三・七 | 六、六〇四 | 四・一 | 一三、九五三 | 四・七 |
| 鐵嶺 | 七、一四五 | 四・八 | — | — | 一六、一九六 | 六・七 | 二八、五三二 | 八・五 | 一三、五五二 | 八・三 | 二七、三三四 | 九・一 |
| 開原 | 一五、四八六 | 一〇・三 | — | — | 二〇、一五二 | 九・三 | 三五、一〇四 | 一〇・五 | 一七、一八六 | 一〇・五 | 三三、五一四 | 一〇・八 |
| 四平街 | 一四、四九八 | 九・七 | — | — | 一四、八〇二 | 七・六 | 二六、一五七 | 七・八 | 一三、六三六 | 七・六 | 二六、五七三 | 八・九 |
| 公主嶺 | 四、五五一 | 三・〇 | — | — | 六、二五二 | 二・八 | 九、七五〇 | 二・九 | 五、四七五 | 三・五 | 九、〇七八 | 三・〇 |
| 長春 | 八二、四八六 | 五四・九 | — | — | 一〇六、九七六 | 五二・七 | 一五一、七三七 | 四五・二 | 七八、九六九 | 四八・五 | 一三一、四一三 | 四四・二 |

猶右到著者と炭礦勞働者の關係を見る爲に採炭華工の移動數を藉れば

| 種別／年次 | 昭和三年 | 昭和四年 |
|---|---|---|
| 遠地募集 | 一、四八〇 | 一、四五〇 |
| 自來 | 一二、四四一 | 九、七五二 |
| 合計 | 一三、九二一 | 一一、二〇二 |
| 退散 | 一五、八八八 | 一二、五九八 |
| 年末現在數 | 九、八四五 | 八、四四九（十月末現在數） |

註　四年度數字は十一、十二月の數字を含まず。

即ち採炭華工は八九千名なるにも拘らず、其の移動數たる退散、來礦數の年計は一萬三四千名にして、移動率は極めて高い。併し乍ら此の退散者の補給は全部新渡來者に據つて爲されてゐるかに就ては、約千五百名の遠地募集者がある程だから、到底想像出來得ない。故に炭礦勞働者と新渡來者との關係も明白には斷言出來ないが、大した數ではないと思はれる。假に退散者の全部が新渡來者によつて補給されたとするも約一萬二千と云ふ數は全年到來者約七萬に對し、精々六分之一にしか相當しない。畢境撫順到著者も炭坑勞働者以外のもの即ち附近農村の農業勞働者、瀋海線背後地々方の出稼者親戚知己の依賴者等と云ふことになる。

## 第六款　長　春

五萬の見當かと思はれる。之を大連に於ける夥しき殘留者と比較して奇異の感なきにあらざるも、兩者何れも完全なる數字ではなく幾多考究の餘地を存するを以て、適當なる判斷は將來研究の結果に讓らねばならぬ。

## 第五款　撫順

本年撫順到著數に就いて大連營口からの客車搭乘者等の不明の分を除外して各經路別に表示してみるに次の如くである。

| 年次／仕向驛 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | 全年 | 上半期 | 全年 | 上半期 | 全年 |
| 大連 | 二四、六三〇 | — | 一七、八二九 | 二三、八八二 | 一二、四一一 | 一六、一七七 |
| 營口 | 二、一八八 | — | 三、八九二 | 五、六一〇 | 五、一一七 | 六、八七二 |
| 安東 | 七三六 | — | 五八七 | 五八七 | 六〇七 | 一、六二九 |
| 奉天 | 一五、一三七 | — | 三三、二三四 | 五七、二二八 | 二三、〇八一 | 四六、二三九 |
| 合計 | 四二、六九一 | 六四、七一〇 | 五五、五四二 | 八七、三〇七 | 四一、二一六 | 七〇、九一七 |

即ち上半期に約一萬五千、全年に約一萬六千の減少を來して居る。恐らく前記不明の分も本年はそう大した數ではなく、全年を通じて五萬五六千内外だらうと思はれる。

のがある。

長春驛到著三等乘客數月別統計

| 月次 | 員數 | 月次 | 員數 |
|---|---|---|---|
| 四年一月 | 四七、八九三 | 四年七月 | 六〇、四四九 |
| 同二月 | 三六、九八四 | 同八月 | 四八、二五一 |
| 同三月 | 一一五、四七四 | 同九月 | 四九、七七九 |
| 同四月 | 一〇二、八九八 | 同十月 | 五六、三九八 |
| 同五月 | 六七、八二四 | 同十一日 | 五〇、四〇四 |
| 同六月 | 五一、〇二〇 | 同十二月 | 三九、〇一六 |
| 上半期計 | 四二二、〇九三 | 全年合計 | 七二六、三九〇 |

同地の觀察に據れば三等乘客の年平均約三〇%を以て出稼移民とする、故に出稼時期の上半期を之よりも稍々多く見て約四〇%として計算すれば全年二一七、九一七、上半期一六八、八三七となる。

右客車搭乘の出稼移民と前掲各經路別大連、營口よりの貨車に依る長春到著數の合算即ち上半期二六七、二五二、全年三四八、五〇九が大體本年長春着出稼移民の總數と目すべきである。

然して右の數より款頭揭載の各經路別合計數を差引いた殘餘の數上半期八五、八五五、全年八〇、〇九六は奉天、

一、到著數

齊々哈爾を中心とする東支鐵道西部線背後地進入の捗經路たる打通、洮昂兩線の全通並に同線難民無賃輸送の恩點は、必然的に長春驛到著數減少の結果を來した。次に大連營口からの貨車搭乘者、及安東奉天からの客車搭乘者中長春驛下車數を摘記表示する。

最近三箇年長春驛下車移民數統計

| 年次／仕出驛 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 上半期 | 全年 | 上半期 | 全年 | 上半期 | 全年 |
| 大連 | 八〇、四六三 | — | 八九、八三九 | 一一一、三五〇 | 六七、八六七 | 八四、四三一 |
| 營口 | 三四、四〇七 | — | 三六、〇二四 | 五七、三六三 | 三〇、五四八 | 四六、一六一 |
| 安東 | 五、八八八 | — | 六、七一九 | 七、〇三五 | 四、〇一三 | 五、〇八五 |
| 奉天 | 八二、四八六 | — | 一〇六、九七八 | 一五一、七三七 | 七八、九六九 | 一三二、四一三 |
| 合計 | 二〇三、二四四 | 二六九、九七三 | 二三九、五六〇 | 三二七、四八五 | 一八一、三九七 | 二六八、〇九〇 |

註　一、本表には大連、營口からの客車搭乘者を加算せず
　　二、昭和二年全年數は仕出地驛別數不明につき之を計上せず

即ち本年上半期長春到著數は約十八萬にして前年に對し約四萬八千の減少を示し、全年を通じて見るときは約六萬の減少にして各經路とも長春到著數を減ずるを見る。次に之を長春驛到著の三等乘客數より窺ふに、次の如きも

| 鐵道別＼期別 | 上半期 | % | 全年 | % |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 東支鐵道 | 四二〇、五七五 | 八〇・六 | 六四五、五六九 | 七七・五 |
| 吉長鐵道 | 一〇一、四〇一 | 一九・四 | 一九六、三三八 | 二二・五 |
| 合計 | 五二一、九七六 | 一〇〇 | 八四一、九〇七 | 一〇〇 |

註　本表數字には一、二等乘客を含む。

本表數字は註記の如く一二等乘客を含むも、長春及寛城子驛より東支鐵道に乘車する一、二等乘客は極めて尠なく、三等乘客に對する最近五ヶ年の平均率は僅に一・九%に過ぎない。吉長鐵道に於ける一、二等乘客をも同率を以て算出し得られるか何うかは明答出來ないが、假りに大なる相違はないと判斷して二%の比率に據り前掲東支、吉長轉乘の三等以下の乘客數を推算すると、上半期五一一、五三六、全年八二五、〇六九となる。

## 四、分布狀態

敍上三等乘客數に根據して本年度長春を中心とする出稼移民の分布狀態の概況は窺知し得られない譯ではないが、長春地方事務所の報告に據れば次の如くである。

| 鐵道別＼期別 | 上半期 | 全年 |
| --- | --- | --- |
| 東支鐵道北行數 | 二三二、八八〇 | 二八七、二九二 |

安東よりの客車搭乘者を除く三等客にして、大部分は大連、營口兩驛發の客車搭乘者と看做して差支へあるまい。

二、汽車に依る出稼者の長春驛下車の割合

次に長春到著數の各發驛に於ける乘者總數に對する割合を求むれば左に表示の如く。

最近三箇年長春驛下車數の全數に對する割合（上半期）

| 年次／仕出驛 | 昭和二年 | | | 昭和三年 | | | 昭和四年 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 發驛總數 | 長春到著數 | % | 發驛總數 | 到著數 | % | 發驛總數 | 到著數 | % |
| 大連 | 一六〇、七四三 | 八〇、四六三 | 五〇 | 一五九、五五二 | 八九、八三九 | 五六 | 一三四・六一六 | 六七、八六七 | 五〇 |
| 營口 | 六五、二七六 | 三四、四〇七 | 五三 | 五五、一一四 | 三六、〇二四 | 六五 | 六〇・六二九 | 三〇、五四八 | 五〇 |
| 安東 | 一〇、九九八 | 五、八八八 | 五三 | 一一、〇四五 | 六、七一九 | 六一 | 七、一六四 | 四、〇一三 | 五六 |
| 奉天 | 一五〇、二〇一 | 八二、四八六 | 五五 | 二一二、九三一 | 一〇六、九七八 | 五〇 | 一六二、九一〇 | 七八、九六九 | 四九 |
| 合計 | 三八七、二〇八 | 二〇三、二四四 | 五二 | 四三八、六四二 | 二三九、五六〇 | 五三 | 三六五、三一九 | 一八一、三九七 | 五〇 |

即ち長春驛下車數の減少は既述の如くなるも、其の全數に對する割合は右表指示の如く低下し、こゝにも前年に對する本年度出稼移民の北上者減退の事實が認め得られる。

三、東支鐵道及吉長鐵道轉乘者

長春驛の統計を徵するに、本年東支、吉長兩鐵道乘客は次の如くである。

| | |
|---|---|
| 東支鐵道南下數 | 一五一、〇七二 |
| 吉長鐵道南下數 | 二〇、九四七 |
| 合計 | 六五九、二五七 |

註　東支鐵道南下數は一、二等乘客數を二・四%（過去五箇年平均一二等乘客の三等客に對する割合）として之を扣除した。

右歸還者中出稼移民の含有率を出稼の場合こ同樣の比率なりこすれば、長春より歸還する出稼移民は二八四、九一二にして出稼移民この差引數六三、五九六が吉長及東支背後地に定住したこ認むべきである。

尙之に關する詳細なる記述は次章に讓る。

| | | |
|---|---|---|
| 吉長鐵道北行數 | 一二、二一三 | 一七、二二二 |
| 合計 | 二四五、〇九三 | 三〇四、五一四 |

右の外更に長春殘留者數、長春西北方地方の出稼移民を考慮するときは既述貨車、客車搭乘者を根據として推算せる長春驛下車の出稼移民數三四九、八九五人と略々一致する。之に據り本年度長春に下車した移民の分布數は次の如く想像せられる。

| | | |
|---|---|---|
| 北滿 | 二三二、八八〇 | 二八七、二九二 |
| 吉長吉敦方面 | 一二、二一三 | 一七、二二二 |
| 長春西北方地方 | 六、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 |
| 長春殘留者及其の他地方 | 一六、一五九 | 三三、九九五 |
| 合計 | 二六七、二五二 | 三四八、五〇九 |

註　長春殘留者及徒歩四散者の數、過多の感なきに非ざるも前掲滿鐵線主要驛分布數（第三章第一節第一款參照）中鐵嶺、公主嶺の如き他線聯絡なく、又背後地も長春に比して遜色あると思はれる地方に於いてすら鐵嶺約二萬七千、公主嶺一萬八千を算するに見れば、大差なきものと看て差支へあるまい、然して同數には吉長、吉敦方面沿線へ向ふ徒歩者も幾分は含まれるべきである。

## 五、歸還數

次に長春より乘車歸還するもの幾許なるかを見る爲其の三等乘客數を掲ぐることゝする。

| | |
|---|---|
| 長春自驛乘車數 | 四八七、二三九 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 3 | 東支東部線及其背後地方 | 六一、一四二 | 七二、五八七 |
| 4 | 松花江下流地方 | 一〇五、八七五 | 一二八、四〇九 |
| 5 | 呼海線地方 | 三一、九〇七 | 三九、〇九五 |
| 6 | 東支西部線及其背後地方 | 五一、五二七 | 一〇〇、五五七 |
| 7 | 其他地方（黑龍江流域地方其他） | 二七、三七〇 | 三七、二二七 |

本數の據つて來る所以は以下各項に於て之を記述する。

然して右奧地進入者の總計は上半期約四〇一、〇〇〇全年約五六四、〇〇〇にして、入滿總數から之を差引いた殘り上半期約二五九、〇〇〇、全年約五一六、〇〇〇は入滿咽喉地及滿鐵沿線の都市勞働者並に其の附近村落への農業勞働者其他親戚知己依賴者として同地方に殘留したものである。

# 第一節 南滿

## 第一款 分布概況

本年度北行者の著しき減退は、渡滿總數の減少僅少に止まることを前提とする限り、直に南滿分布數の增加を指示するものなることは論を俟たない。前記北滿各地方分布數を控除した殘り、即ち上半期約三十九萬、全年約六十九萬は、入滿總數に約五八%、全年約六四%を占め、前年に於ける南北滿洲比率轉換の結果を來した。併し乍ら之を以て南滿移民地帶進入者の增加と認容し難き事情にあることは、奧地の情報からばかりでなく、既に滿洲渡來以

# 第四章　奥地分布狀態

前章各項に亙つて出稼移民の入滿咽喉地から滿鐵線主要各驛への分布狀態に關し敍述を試みたが其の間屢々入滿數の前兩年に對する減少極めて少數に止まりしに拘らず、北行數に稍々注目すべき減退あることを認めた。奥地各所からの報導も移民到來の激滅を傳へて大體之を裏書せるの觀がある。

本年度奥地分布數は次の如く推定した。

| | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 一、南滿 | 一一五、〇〇〇 | 一七五、〇〇〇 |
| 1 瀋海鐵道及開拓鐵道の背後地方 | 四三、〇〇〇 | 六五、〇〇〇 |
| 2 四洮、洮昂沿線及其背後地方 | 二〇、〇〇〇 | 三〇、〇〇〇 |
| 3 京奉沿線及其背後地方 | 六、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 |
| 4 長春西方及西北方地方 | 六、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 |
| 5 鴨綠江流域地方 | 一五、〇〇〇 | 二五、〇〇〇 |
| 6 吉長鐵道及吉敦鐵道沿線及背後地方 | 二五、〇〇〇 | 三五、〇〇〇 |
| 二、北滿 | 二八六、〇〇〇 | 三八九、〇〇〇 |
| 1 東支南部線及其の背後地方 | 一、三四四 | 一、八二八 |
| 2 哈爾濱管區 | 六、八三五 | 九、二九七 |

後地方面に向つたものも尠からざるものゝ如く傳へられるに依り、之を考慮すると實際瀋海沿線及其の背後地方に定著したものは上半期約三萬、全年約四萬五千ぐらいの見當であらう。然して其の大部は契約移民、即ち季節的に渡來したり歸還するところの農業勞働者と看做して差支へなかるべく、荒蕪地開拓に同地方に入り込むものは他に條件の優利なるところのある限り餘り無いと認められる。

## 二、開豐鐵道背後地方

開原驛下車數を仕出驛別に列擧して本年度同地方進入者の如何を觀るに次の如くである。

最近三箇年開原驛下車數仕出地別統計

| 年次／仕向地 | 昭和二年 上半期 | 昭和二年 全年 | 昭和三年 上半期 | 昭和三年 全年 | 昭和四年 上半期 | 昭和四年 全年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 一一、二〇三 | — | 五、五一七 | 七、五八三 | 四、六三六 | 六、一〇八 |
| 營口 | 一、二一三 | — | 六九八 | 二、〇三九 | 一、〇九八 | 二、二九五 |
| 安東 | 三二七 | — | 二四〇 | 二四〇 | 九二 | 一七六 |
| 奉天 | 一五、四八六 | — | 二〇、一五二 | 三五、一八四 | 三二、五一四 | 三二、五一四 |
| 合計 | 二八、二二九 | — | 二六、六〇七 | 四五、〇四六 | 二五、〇一二 | 四一、〇九三 |

右表に據れば本年は前號に對し上半期約一千五百、全年約四千の減少にして、同地地方事務所の回答に據れば上

後の彼等の移動狀況に就て推知し得た。

然して奥地移民地帶への分布數は前揭の如くにして、本年度分布に就いて特記すべきことは、五月末より陸續として殺到した避難民が、打通、洮昂兩線に依り輸送され、其の過半は通過して黑龍江省方面に入込んだとは雖も、猶多數の同沿線背後地方定著者を見たことである。從來同地方に向ふ移民は意想外に尠なかつたに反し、本年は興安屯墾區の招墾と相俟つて大いに增加を見た、其の他の移民地帶進入者に就ては前揭の如く何れも減少を呈した。尙詳細なる事情は次款各項に讓る。

## 第二欵　各地狀況

### 第一項　瀋海沿線及開豐鐵道沿線及其の背後地方

一、瀋海沿線及開豐鐵道沿線背後地方

本地方出稼移民に就いて朝陽鎭居住者及吉林方面の情報を綜合するに、早春三月頃に多少の移民と覺ぼしき者の到來を見たに過ぎず、前年に比し激減したと稱されてゐる。併し乍ら前揭奉天驛に於ける到著數と乘車數の差引數(第三章第二節第四款參照)及撫順到著數(同上五款參照)から想像するに前年との差異は大したものではないと考へられる、又奉天驛報告に據る十二月中瀋陽驛の移民乘車數は約七千とあり（註。歸還時期として幾らか過多の觀あるも）之等の資料を綜合すると大體上半期四萬、全年六萬位の出稼者はあつたと思惟される。此の中吉海線に依り敦化背

るもの、數を最近三箇年に就いて列擧すれば次の如くである。

### 最近三箇年四平街驛發驛移民下車數

| 年次／仕出地 | 昭和二年 上半期 | 昭和二年 全年 | 昭和三年 上半期 | 昭和三年 全年 | 昭和四年 上半期 | 昭和四年 全年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 二、七三七 | — | 四、〇三七 | 五、〇七六 | 六、二六四（一、六二八） | 七、二一五（二、三三三） |
| 營口 | 七〇〇 | — | 九〇四 | 一、七四二 | 六、九九九（一、八三四） | 一〇、五〇八（一、九九七） |
| 安東 | 二六三 | — | 二四二 | 二四二 | 一四七 | 二四二 |
| 奉天 | 一四、四九八 | — | 一四、六〇九 | 二六、一五七 | 二一、六三六 | 二六、五七二 |
| 合計 | 一八、一九八 | 二〇、七三四 | 一九、七九二 | 三三、二一七 | 二六、〇四六（三、四六二） | 四四、五三七（四、三三〇） |

註、昭和四年括孤內數字は大連、營口發四洮線連絡輸送孩の貨車搭乘者にして本數には之を含む。

本年度に於いては註記の如き大連、營口からの連絡輸送者の加算もあり、上半期約六千人全年度約一萬一千人の著增を呈したが、之を控除して前年度と比較してみても、尙七千名の增加はある。發驛別に之を視るに營口の增加は約七倍と云ふ異常を呈し大連からの渡來者も上半期全年とも約二千の增加を示し、減少はたゞ奉天、安東を合して約三千人あつたのみである。奉天の減少は本年打通綫利用者の著增に依り、當然有り得べきことだと考へられるが尙奉天よりの到來數約二萬三千の著しきを占むるの事情は奇異の感を抱かしむるものがある。之が原因として二

半期中開原縣下に落着いたものは約二千名程度に過ぎず、西豐、西安、東豐方面進入の爲開豐鐵道搭乘者は約一萬人と稱する。之に東山地方徒步進入者を加算すれば、大體本年度同地方に向つたものは上半期約一萬三千、全年約二萬位のものであらう。右開原縣内に留まる者は悉く小作契約或は雇傭契約に依り農耕に從事するものであり、從來同地附近村落及奥地に入込むもの、移住狀態を觀るに、親戚或は友人故舊の手蔓の有る者に限られ、然らざる者は北滿方面に移動するの傾向あるを以て、奥地進入者と雖も、開原縣下に留まる者と同樣の契約の下に各々落着くものと考へられる、故に前掲開原驛下車數なるものは所謂季節勞働者なること明らかにして、延いて斯の種の移動は既に耕作し盡された全滿諸地方に慣習的に行はれてゐることが想像されるのである。

### 第二項　四洮、洮昂沿線及其の背後地方

打通線難民輸送制度の普及と、饑饉、戰禍に脅かされて老幼眷族相携へ、當地方及び黑龍江省方面に殺到した河南省避難民の新參加を見た本年は、從來の如く四平街驛下車數の大部を以て、直に當地方出稼者及び移住者の全部と看做し、又四洮、洮昂兩線輸送數の全部を目して當地方に定住するものとも早斷を下し得ざる結果を來した。併し乍ら經過數の激增は興安屯墾區の招墾と相俟つて、自ら當地方定著數にも激增を齎せることは必致の事實にして本年度當地方定著數は上半期約二萬、全年約三萬と推定した。

一、四平街驛下車數

順序として先づ四平街驛下車數の增加如何に就いての考察を、試みる資料として入滿咽喉地から四平街に下車す

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 泰來 | — | 三一 | 一、四四〇 | 五〇五 | 二五 | 七 | 二、〇三八 | 五 | 三 | 八 | 四七 | 二、一一〇 |
| 瑠子 | — | — | 一七九 | 七三二 | 四 | — | 三三〇 | 五 | — | 一 | — | 三二六 |
| 江橋 | 八 | — | 二五 | 四 | — | — | 三七 | 三 | — | 八 | — | 四八 |
| 大興 | — | — | 四 | — | — | — | 四 | — | — | — | — | 四 |
| 昂々溪 | — | 一四七 | 一、一四三 | 六七〇 | 八七九 | 一、〇〇六 | 二、八四四 | 一二 | 六 | 二六 | 二五 | 四、〇三一 |
| 龍江 | 二、〇〇〇 (二、〇〇〇) | 四四 | 一、八五七 | 六二 | 一、七九一 (一、四九五) | 三、〇三〇 (二、九四二) | 九、三三三 (六、四三七) | 二〇、六四二 (二〇、六二五) | 九、四九七 (九、四六〇) | 八、三五六 (八、三四三) | 三三 | 四七、八二六 |
| 合計 | 二、〇〇〇 (二、〇一五) | 二二二 | 四、八八八 | 一、九七三 | 五、六六〇 (一、七三五) | 六、七六九 (四、三三二) | 二一、五二六 (八、〇五七) | 二〇、六六八 (二〇、六二五) | 九、五〇六 (九、四六〇) | 八、四二一 (八、三四三) | 一〇五 | 六〇、三四六 (四六、四八五) |

註、括弧內數字は難民にして本數內に含む

右表に據れば十月までの合計、實に六〇、三四六の多數を算し、從來出稼の略々終了すべき時期と目された六月以後に其の大半が渡來したこと、共に新奇の現象であつて、其の大部は河南省からの避難民であつた、然して上半期の渡來數と雖も之を前年同期間四洮線四平街驛に乘車したる出稼移民數に比して遙に增加を呈せることが窺はれる

昭和二年　四洮線四平街驛乘車數　一六、三九〇人

昭和三年　同　一二、九四七

昭和四年　洮昂線洮南驛乘車數　二一、五二六

計算の基點を異にする右數字に於て直に增減の判斷は下し得ないが、假令前年に於て打通線より北上したる約七千九百名の加算が省略されてゐることは云へ、本年の洮昂線輸送數には洮南地方定住者約一千三百名及洮南、四平街

樣の想像が許される。即ち一は打通線の輸送能力に制限せられたと解し、他は滿洲內移動者を多數に含むものであると爲すにある。果して兩者の何れに歸すべきかは、充分研究の結果に非ざれば斷定は下し得ないが、大體奉天驛乘車主要驛分布數の大部は北寧線下車數であること（第三章第二節第四款參照）並に滿洲內移動者の出身は多く安東、鳳城、寬甸等安奉線背後地方の各縣及海城、蓋平方面なるを以て、前表に見る安東よりの渡來者減少の事實は後者の想像を否定するものにして大體前者に歸して考へて差支へあるまい。何れにしても本年は一般的傾向として入滿總數の遞減、奧地進入者の減少が認められたに拘らず、獨り四洮、洮昂背後地方進出者と認むべき四平街驛下車數の增加は、興安屯其他同地方移民招墾先導機關の目覺ましき活躍に依り齎らされた結果と看るべきであらう。

## 二、洮昂鐵路移民及避難民輸送數

洮昂鐵路の移民難民輸送數を月別仕向驛別に表示すると次の如くである。

洮昂鐵路移民及び難民輸送表（民國十八年度）

| 仕向驛＼月次 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 計 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 白城子 | 一 | 一 | 二四 | 一五 | 二、八七〇<br>（二四〇） | 二、七三二<br>（一、三八〇） | 五、六四一<br>（一、六二〇） | 一七 | 一 | 一 | 一 | 五、六五八 |
| 鎭東 | 一 | 一 | 一〇九 | 五〇 | 五 | 四 | 一六八 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一六八 |
| 東屏 | 一 | 一 | 五一 | 六四 | 五三 | 一 | 一六八 | 一 | 一 | ! | 一 | 一六八 |
| 街基 | 七 | 一 | 五七 | 一六 | 三 | 一 | 八三 | 五 | 五 | 一〇 | 四 | 一〇七 |

前掲洮昂鐵道輸送表に於て打通線より北上したと目すべき難民及開魯、通遼地方に定住した打通線利用者を列擧すれば次の如くである。

| | 六月末迄 | 十月末迄 |
|---|---|---|
| 洮昂鐵道難民輸送數 | 八、〇五七 | 四六、四八五 |
| 通遼開魯附近定住者 | 五、一〇〇 | 五、一〇〇 |
| 合計 | 一三、一五七 | 五一、五八五 |

右は本年度打通線北上者として明瞭なるもの丶みであるが、此の他四洮沿線背後地及四平街より本線に轉乘したるものを考慮すると北寧線より打通線に轉乘したる出稼移民及避難民は上半期約二萬・全年約六萬見當なるべし。

五、興安屯墾區移民

興安屯墾區への移民は民國十八年二月に北平（舊北京）にある旅平河南賑災會より河南各縣の罹災民救濟の爲、同區に收容方依賴ありたるに依り、同區は之に對し五千人餘の災民引受の承諾を與へた。茲に於いて同年五月より河南省避難民は賑災會派遣員附添ひの下に北寧線打虎山に陸續として到來し、打虎山からは墾署の案内援助に依り打通、四洮洮昂線を經由して洮安に輸送され、洮安到着後は屯墾公署の手によつて之等の移民は適宜に荒蕪地に配屬された。其の内容は次の如くである。

第一團配屬災民　男女老幼　一、八四六名

内品行不正及嗜好不良なる者解除者十八名、逃亡者數名、附近穀物問屋一般商家は雇傭者百四十二名、

間各驛の下車數が含まれてゐないか　、之等を考慮すれば、前年に對する增加は前揭數の差異八、五七九以上だと考へて差支へあるまい。

## 三、分布狀態

分布狀態は前揭輸送統計を一瞥すれば明瞭であるが、餘りに詳細に過ぐるの嫌ひあるを以て左の如く大別して概觀の便に資することにした。

| 地方別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 一、四洮鐵路沿線及背後地 | 一三、〇〇〇 | 二〇、〇〇〇 |
| 二、洮昻鐵路沿線及背後地 | 四、〇五七 | 四、一八七 |
| 三、興安屯墾區 | 五、六〇二 | 五、六〇二 |
| 四、黑龍江省方面 | 一三、一六七 | 五一、八五七 |
| 合計 | 三五、八二六 | 八一、六四七 |

註、四洮鐵路沿線背後地移民數は四平街驛下車數の半數と看做したるものなり。

右表黑龍江省方面北行者を除けば大體同地方本年度出稼移民は上半期約二萬五千、全年約三萬と看做して差支へない洮昻沿線中では泰來二、一一〇にて最高を占むるも、他は極めて尠ない。興安屯墾區移民約五千六百名は、屯墾開始初年度としては比較的好成績を示したと謂へる。

## 四、打通線北上數

減少の理由を同地公所の報告を參考として列擧するに。

（一）吉林官銀號の林場閉鎖問題に禍ひせられ、森代伐材夫としての包容力の極めて薄弱となつたこと。

（二）本年度出稼移民に見らる〻僻遠地進入敬遠の一般的傾向。

（三）興安屯墾區方面に吸收せられたこと

大體右の如き事情の影響を受けて減少したものであつて決して當地方の移民地帶としての價値が低下した譯ではない。

## 二、分布狀態

本年は當地方の分布狀態に關し適當の判斷を下し得べき何等の資料をも得て居らない。左揭吉林省政府の調査に係はる各縣別移民入境數は、恐らく各地方の保護機關の厄介になりたる一部の避難のみに限られたるもの〻如く、一般的ではないが、何等かの參考にもと揭上するに過ぎない。

一、吉長、吉敦兩線沿線其の背後地方　三、八八七

吉林縣　二、六六三　舒蘭縣　一三一　額穆縣　二五一　樺甸縣　二五〇　敦化縣　五九二

二、間島地方　八六四

延吉縣　三六〇　汪清縣　五一　琿春縣　二八五　和龍縣　一六八

### 第四項　長春西北方地方

第二團配屬災民　男女老幼計　一、五八四名
第三團同　百一戶合計　一、三七六名
以上の外四十歲以下十五歲以上の壯丁約三十餘名を各團の平射砲隊に編入し、其の餘の數百人は鐵路工程局に於て、道路修築の作業に從事せしめた。
尙屯墾公署の詳細なる事情に就いては改めて記述するが、斯の如く同公署の計畫は着々實現され、昭和五年度に於いては約三十萬の移民募集を爲し、地方開拓に一大飛躍を試みんとしつゝある。此の事實は單に移民問題の視點からばかりでなく、識者の注目の的である。

## 第三項　吉長、吉敦沿線及其の背後地方

### 一、移民到來數

敦化を中心とする牡丹江上流々域地方は南滿中最も高き包容力を有つ移民地帶とも稱せられ、昭和二、三、兩年度に於ては事實當地方定住者は南滿に於ける他の移民地帶に比べ最多數の避難民及移民を吸收して首位を占めた、然るに本年吉林公所の報告には昭和三年度滿鐵、吉長兩線から吉敦線を經て敦化方面に落着いた純然たる移民は概略四千八百戶の多數を算したるに對し、本年は僅かに八百戶にして激減を見たことが報ぜられ、一方長春驛の觀察も全年を通じて精々約二萬位のものであり、激減は誤りなきものゝ如く、吉海線の開通により瀋海線を經て同地方に出たものを上半期約一萬、全年約一萬五千と見立て、加算しても本年度當地方到來數は上半期約二萬五千、全年約三萬五千にして前年推定數に對し約一萬五千の減少である。右

## 第一款　總數

本年北滿諸地方へ入り込んだ出稼移民總數の減少に就ては、入滿咽喉地たる各海港及北寧線關係並に滿鐵線主要驛の分布狀況に於いて、此の間の消息を豫想することが出來たが、北滿方面の情報にも、所有機關が荒蕪地の開拓經濟的開發に企圖して移民の吸收に努力を致し、東支鐵道の如きも背後地進入を容易ならしむる爲に、種々の便宜を提供したるにも拘らず、到來した移民は前年に對し激減したと謂はれてゐる。

而して長春驛の下車數、東支鐵道の乘車數を基本として推算したる本年度出稼移民の北滿到來數は上半期約二十八萬、全年約三十九萬見當である。

即ち長春驛推定の出稼移民東支鐵道乘車數は上半期二三二、八六〇、全年二八七、二九二であつて、之に洮昂鐵道に依り昂々溪、齊々哈爾に出たもの上半期一三、一六七、全年五一、八五七を加算すると、汽車に依り北滿へ進入した移民は上半期二四六、〇二七、全年三三九、一四九である。此の他北滿へ徒歩進入するものに就いては全く何等基準となるべき資料はないが、勿論本年と雖も皆無なる筈がないから、前二年の數よりいくらか內輪に見積つて全年五萬、上半期四萬とすれば、昭和四年度出稼移民の北滿到著數は上半期約二十八萬、全年約三十九萬の見當である。

以上を要約表記すれば次の如くである。

長春の西北方地方に關する移民分布數に就いては全然情報がない、前記當地方本年度到來數を上半期約六千、全年約一萬とせるは長春驛殘留者を根據として判斷したに過ぎない。（第三章第二節第六款參照）

### 第五項　鴨綠江上流地方

鴨綠江上流地方として上半期約一萬五千、全年約二萬五千の移民を計上したが、右は寧ろ安東、背後地方と稱せねばならぬものであつて。同地方に年々定まつて渡來する季節的勞働者を多數に含み、實際鴨綠江上流の荒蕪地開拓に向つたものは本年度他地方の情況から推すに、恐らく數千の移民も何うかと思はれるぐらいである。

（第三章第二節第四款參照）

### 第六項　北寧線背後地方

打通線開通以來、同線と北寧線との背後地方に明白なる限界を附することは困難になつたが、本年度は兩線沿線並に背後地として僅に通遼に四千六百名、開魯に五百名の避難民が定著したとの報告があるに過ぎず。精々一萬內外の移民が奧地及沿線に定著したと見らるゝ。

倘通遼には昭和四年十月十日遼北荒務局が開設せられ、將來同地方の荒蕪地開拓を企圖せるに依り、相當の移民が吸收される筈である。

## 第二節　北　滿

を通じて觀るときは西部線背後地方進入者は可成高率を呈した。

哈爾濱事務所運輸課に於て昭和三年十月より同四年九月に至る期間に付き觀察せる分布狀態は、其の員數に期間の相違から許りでなく、前掲長春到著數に比して少數なるの感あるも、比率的に大體叙上の事情が窺はれる。故に此の比率を基本として前記本年北滿到著總數を上半期、全年に分けて主要地方別に割出して見ることにした。

| 地方別 | 自三年九月至四年十月 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 上半期 | 全年 |
| 東支南部線地方 | 一、二二八 | 〇・四七 | 一、三四四 | 一、八二八 |
| 哈爾濱管區 | 六、一三九 | 二・三九 | 六、八三五 | 九、二九七 |
| 東支東部線地方 | 四七、八八六 | 一八・六六 | 五三、三六八 | 七二、五八七 |
| 松花江下流地方 | 八四、七二一 | 三三・〇一 | 九四、四〇九 | 一二八、四〇九 |
| 呼海線地方 | 二五、七八五 | 一〇・〇五 | 二八、七四三 | 三九、〇九五 |
| 東支西部線地方 | 六六、三五二 | 二五・八五 | 七三、九三一 | 一〇〇、五五七 |
| 其他地方 | 二四、五五六 | 九・五七 | 二七、三七〇 | 三七、二二七 |
| 合計 | 二五六、六六七 | 一〇〇 | 二八六、〇〇〇 | 三八九、〇〇〇 |

註、自昭和三年十月至同年九月欄數字は哈爾濱事務所運輸課の推定數なり。

右上半期に於ける推定は西部線地方に既述の如き事情あるに拘らず、全年と同比率に據つて計算せるものにして同地方七月乃至十月間の洮昂鐵道北上者の合計は三八、六九〇なれば、十月以降北上移民は皆無とするも、全年推定

| 種別 | 上半期 | 全年 |
|---|---|---|
| 東支鐵道に依るもの | 一三二、八六〇 | 二八七、二九二 |
| 洮昂鐵道に依るもの | 一三、一六七 | 五一、八五七 |
| 徒歩に依るもの | 四〇、〇〇〇 | 五〇、〇〇〇 |
| 合計 | 二八六、〇二七 | 三八九、一四九 |

之を前年度編に於て爲した上半期推定數四十三萬に比し、過少の感なきを得ないが、前述僻遠地進入者減退の一般的傾向からばかりでなく、從來北滿の移民は長春寬城子驛より東支鐵道に乘車したる三、四等客の全部と見たるものあり、四等客に三等乘客の過半數を加算したる程度のものと稱するものあり、或は又之等乘客の含む移民數は約三〇%であると爲し、其の觀察は全く區々たるものがある。併し乍ら以上は總べて三、四等客中に多數含まれるところの滿洲內移動者を見逃せることに於いて一致してゐる。本年度長春驛下車數を基準とする推定には、多少此の缺陷が補はれてゐるものと考へられる。

## 第二款　分布概況

本年北滿諸地方に入込んだ移民の分布狀態に就て參考となるべき資料は、僅に哈爾濱、齊々哈爾兩所よりの回答しか得て居らないが、大體に於て從來の如く松花江下流地方及東支東部線方面に多く移民が吸收されたと稱する說が最も多い。尤も六月頃より河南省の避難民が陸續として打通、洮昂兩線に據り齊々哈爾方面に到來したる爲全年

本數の過少なるは多分避難民こして地方の救濟機關、官廳の施設の保護を受けた極貧者許りが計上されたるものなるこごは明白である。

前揭本年度當地方の吸收せる推定移民數上半期約六萬一千、全年約七萬二千にして、前年上半期の分布數約十三萬に對し可成な減少を呈せるも右は本年度北行者減退の一般的傾向こ、昭和四年七月中に勃發した、露支東鐵問題の紛糾が多少邊境移住の障碍を齎らしたこ見るべきで、此の間の消息は支那側の調査に據り濱江縣其他の地方に邊境から避難民こして六千六百餘名救濟機關の厄介になつた一事に據り窺知し得る。

猶邊境以外の地方即ち東部線沿線の一面坡、魯克士窩待避驛、亞布路尼待避驛、石頭河子等の地方は多年の伐木の結果林地は伐り開かれ、耕地面積に非常な增加を齎らし、各種穀物の蒔付が行はれたこの報導もある、又實際同地方は車中より之等林地の開拓の狀況の一部を望見するここが出來、新興氣分の濃厚な部落の擴張こ共に、多數の移民が吸收されつゝあるここが想像せらるゝ。

海林、牡丹江から寧古塔上流方面も現在旺に移民を吸收して荒蕪地開拓に飛躍しつゝある地方の一である。

### 第二項　松花江下流及黑龍江流域地方

支那側の調査に據る松花江下流及黑龍江流域地方に當る吉林省側の各縣別に就き列擧すれば次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 賓縣 | 二七 | 富錦縣 | 四四五 |
| 方正縣 | 五一 | 同江縣 | 四六四 |

數から同數を差引いただけの數五一、五二七が上半期同地方に分布されたと認むべきである、而して右表計算の西部線地方分布數七三、九三一との差異は、主として東支東部線、松花江下流地方に配屬して考へて差支へあるまい

## 第三款　各地狀況

以上に於て本年度北滿到來者の分布狀況を概觀的に窺ひ得た。然して本年度は地方別に詳細なる狀況を知悉し得るところの完全なる資料は殆ご無く、以下記述せんとするものも明瞭なる範圍にのみに限る。

### 第一項　東支東部線沿線及其の背後地方

東部線沿線及其の背後地方に當る各縣に就き吉林省政府調査に係る各線別移民入境數を列擧する。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 賓江縣 | 六、六〇七 | 東寧縣 | 一二七 |
| 勃利縣 | — | 阿城縣 | 二五八 |
| 饒河縣 | 五 | 楡樹縣 | 三五二 |
| 同賓縣 | 二六 | 五常縣 | 一五一 |
| 珠河縣 | 二六二 | 虎林縣 | 一〇 |
| 葦河縣 | 四八 | 密山縣 | 一〇一 |
| 寧安縣 | 五七 | 穆稜縣 | 四一五 |
| 合計 | 八、四一九 | | |

無かつた。安達、滿溝地方の移民と認むべきもの〻、前年に對する到著數は激減したと稱されてゐる。

洮昂鐵道の輸送統計に據る昂々溪、齊々哈爾到著移民數は上半期一三、一六七名、十月末迄の合計五一、八五六であり、從來に見ぬ盛況を呈した。而も此の數の中約四萬五千は河南省からの避難民にして從來と移民の發生地を異にする。彼等の移住も亦既述興安屯墾區に配屬されたと同樣北平河南賑災會より、各鐵路局、各省政府當局並に各慈善會に救援依賴狀を發したるここに據つて行はれた。

即ち各鐵路局は彼等に對し無賃輸送の便宜を與へ、黑龍省側に於ては民政廳が賑災會の依賴を受け、各縣に移民配屬數を定めて收容方を指令し、管轄各縣は商會又は農會より委員を選任して省城まで派遣し來り、夫々取纏めて自縣に連行した。而して其の汽車賃は免除自動車賃は半減、帆船は無賃(之に對して各縣政府又は商、農會は應分の謝禮金を支出したと謂ふ)として行はれた。

因に支那公安局の調査に係はる各縣の配屬數は次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 龍江縣 | 四、六七一 | 布西縣 | 三五〇 |
| 訥河縣 | 六〇〇 | 呼蘭縣 | 五〇四 |
| 甘南縣 | 四〇〇 | 拜泉縣 | 三、〇〇〇 |
| 肇東縣 | 二、六五〇 | 綏北縣 | 八六二 |
| 明水縣 | 一、九二四 | 安達縣 | 六〇〇 |
| 泰來縣 | 二、二〇〇 | 肇州縣 | 一、九九〇 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 依蘭縣 | 一六八 | 綏遠縣 | 一 |
| 樺川縣 | 二八五 | 寶清縣 | 一八 |
| 合計 | 一、四四〇 | | |

註、本數字は地方の救濟機關の手を煩はした數と認むる。

勿論之だけでは本年度同地方の移民分布狀況を知悉することは困難である。併し乍ら松花江下流地方への凍結期間中に入込むには、從來は徒歩若くは荷馬車に依る以外に方法無く頗る不便なる事情に在つたが、最近に於ける自動者輸送の發達は大いに此の缺陷を緩和し、一般住民の往復に利便を與へたるのみならず、新來移民に對しても好影響あるものと看られる。

此の外松花江流域黑龍江省側に當る湯原縣には、裕民濟墾公司と稱する難民利用の開墾事業會社が設立され（此の種開墾事業會社は他地方にも必ずあると思はれるが、判明しない）將來同地方は急速に移民を吸收するものと想像される。

本年度同地方到來數は前掲の如く上半期約十萬五千、前年約十二萬八千にして、前兩度に對しては可成な減少である。

### 第三項　東支西部線沿線及其の背後地方

東支西部線地方と云つても本年は主として齊々哈爾を中心とした限られた地方に就いてのみ知悉し得る材料しか

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十二年（一九二三） | 三七二、九五三 | 一一八 | 三六二、〇二四 | 一〇九 | 一〇、九二九 | 一〇〇 |
| 大正十三年（一九二四） | 三五三、七一五 | 一一二 | 三三八、五四二 | 一〇三 | 一五、一七三 | 一三九 |
| 大正十四年（一九二五） | 三九八、六一〇 | 一二六 | 三四八、五七一 | 一〇五 | 五〇、〇三九 | 四五八 |
| 昭和元年（一九二六） | 五一〇、九五二 | 一六二 | 三九三、四九五 | 一一九 | 一一七、四五七 | 一、〇七五 |
| 昭和二年（一九二七） | 七八五、六九六 | 二四九 | 四八五、三九四 | 一四七 | 三〇〇、三〇二 | 二、七四八 |
| 昭和三年（一九二八） | 七二九、七八一 | 二三一 | 五二六、二一二 | 一五九 | 二〇三、五六九 | 一、八六三 |

即ち乘車數の指示するところは昭和元年に稍增加を見、翌年の同二年には更に躍進的の增加を呈し、三年度は稍々低下して、全く入滿咽喉地に於ける增加の趨勢と一致し、明白に統計上に出稼移民の北來が現はれてゐることを窺知し得る。

同下車數に於ても乘車數の增加に伴れて漸年增加の傾向が認められるが、漸進的にして乘者數に於けるが如くでないことは、其の差引數に於て北滿殘留者の增加となつて現はれ、春來秋去の渡鳥的な季節勞働者よりも、永住半永住民の增加を說明するものであり。此の間の消息も既往に於て確めた昭和二、三兩年度の入滿咽喉地の事情と略々一致する。

尙昭和三年に於ける乘車數の前年に對する減退下車數の增加は同年下半期に入るや、彼等の原籍地たる直魯兩省の時局稍々安定せる爲の影響と見るべきであらう。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 克山縣 | 五八一 | 林甸縣 | 一、五八三 |
| 合計 | 二四、三六〇人 | | |

此の外齊克鐵道工事從業者等も相當あつたらしく又從來殆ど移民を見なかつた齊々哈爾以西の沿線各地方も東支鐵道トラクター隊の荒蕪地開墾に依り多少の移民を吸收せるもの丶如くである。

## 第四款　東支鐵道統計に據る移民增加の考察

最後に一九二八年（昭和三年）までの東支鐵道旅客輸送統計に據り、移民激增年度即ち昭和二、三兩年度の數字に對する考察を試み本年度出稼移民の分布狀況其他に關する參考に附する。

### 第一項　長春、寬城子驛に於ける乘車數及下車數

汽車に據る北滿到來數は打通線の完全なる開通を見なかつた前年度までは、殆ど全年長春、寬城子兩驛經由にて北行したことは論を俟たない、故に兩驛上下車の三、四等客に就いて統計を徵すれば、自ら移民激增の影響が現はれなくてはならぬこ考へられる、之に就いて大正十一年後の統計を藉りて說明に資する。

長春、寬城子驛に於ける乘車數及下車數

| 年次 | 乘車數 員數 | 乘車數 指數 | 下車數 員數 | 下車數 指數 | 差引增減 員數 | 差引增減 指數 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年（一九二二） | 三一五、三三九 | 一〇〇 | 三三〇、九八四 | 一〇〇 | △ 一五、六四五 | — |

呈せるを見る、勿論旅客の移動は北滿の經濟的開發に伴ふものなりとは雖も、長春、寬城子兩驛乘車數の增加と對照して考へるに、明かに移民の激增並に之に依り刺戟を受けた北滿原住者にして荒蕪地開拓に移動するもの〻增加を說明するものである。たゞ哈爾濱管區、南部線に於ける增加が東西兩線に於けるが如くならざるは哈爾濱管區下車數中には東西兩部線からの到來者を含み、南部線には長春、寬城子驛に下車する出稼者の歸還數を含むを以て、東西兩部線と同樣の理由の下に觀察を行ふことは不當である。

## 二、東支鐵道各線別乘車數

之と反對に次表東支鐵道各線別の乘車數は歸還者の移動を觀察する爲に掲上した數字ではあるが、南部線及哈爾濱管區乘車數に對しては下車の場合に於けると同樣の考慮が拂はれなくてはならない。

東支鐵道各線別乘車數

| 線別／員數／年次 | 西部線 | | 哈爾濱管區 | | 東部線 | | 南部線 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 大正十一年（一九二二） | 二五二、八八八 | 一〇〇 | 六三八、七七六 | 一〇〇 | 六三八、一六五 | 一〇〇 | 五八五、五一五 | 一〇〇 |
| 大正十二年（一九二三） | 二五六、七九七 | 一〇一・五 | 六八六、二〇六 | 一〇七 | 六九七、六三四 | 一〇九 | 六九二、四九一 | 一一八 |
| 大正十三年（一九二四） | 二五九、三五五 | 一〇二・六 | 六二八、〇三三 | 九八 | 六〇八、八三九 | 九五 | 六五三、三〇四 | 一一二 |
| 大正十四年（一九二五） | 三五三、〇一六 | 一三九・六 | 六四八、九四五 | 一〇二 | 七〇〇、〇九八 | 一一〇 | 七〇七、三三五 | 一二一 |

## 第二項　東支鐵道各線別旅客輸送統計

東支鐵道各線別旅客輸送統計を藉りて移民の激增と其の分布狀態を觀ることゝする。

### 一、東支鐵道各線別下車數

先づ各線に到著したものから考察する爲に各線別に下車數を表示すれば次の如くである。

東支鐵道各線別下車數

| 年次＼員數 | 西部線 | | 哈爾濱管區 | | 東部線 | | 南部線 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | 指數 | 員數 | 指數 | 員數 | 指數 | 員數 | 指數 |
| 大正十一年（一九二二） | 二五五、三三三 | 一〇〇 | 七〇一、七三二 | 一〇〇 | 六三九、〇一七 | 一〇〇 | 五九四、二八八 | 一〇〇 |
| 大正十二年（一九二三） | 二六八、二三三 | 一〇五 | 六七八、七一九 | 九七 | 七〇〇、三九六 | 一一〇 | 六七八、四八八 | 一一四 |
| 大正十三年（一九二四） | 二六七、〇一二 | 一〇五 | 六二三、九八六 | 八九 | 六二七、九三四 | 九八 | 六〇六、七七〇 | 一〇二 |
| 大正十四年（一九二五） | 三六三、九五〇 | 一四三 | 六七八、四七六 | 九七 | 七一三、五二三 | 一一二 | 六二〇、二四五 | 一〇四 |
| 昭和元年（一九二六） | 四九六、三八五 | 一九四 | 八四七、六七五 | 一二一 | 一、〇九九、〇一九 | 一七二 | 七六一、二四二 | 一二八 |
| 昭和二年（一九二七） | 六九三、五七三 | 二七二 | 一、一七七、八四七 | 一六八 | 一、四七四、一九四 | 二三一 | 一、〇一六、三四五 | 一七一 |
| 昭和三年（一九二八） | 八四九、六八二 | 三三三 | 一、二四六、一七九 | 一七八 | 一、六七八、三四六 | 二六三 | 一、一八二、二四一 | 一九九 |

右表に據れば各線共逐年增加せるも、東支、東、西兩線は步調を一にして昭和元年度、同三年度に躍進的增加を

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大正十四年（一九二五） | 一〇、九三四 | 二九、五三一 | 一三、四一四 | △八七、〇九〇<br>（△三〇、三六七） |
| 昭和元年（一九二六） | 二五、九二八 | 六六、一〇二 | 四一、七三九 | △一六二、一〇四<br>（△五九、三六二） |
| 昭和二年（一九二七） | 五五、三五二 | 一六三、七五七 | 九七、五九一 | △三五九、六六四<br>（△四八、二一五） |
| 昭和三年（一九二八） | 三一、三四〇 | 一二一、二一一 | 八〇、九七七 | △二五一、七八四 |

註、△印のあるは下車數に對する乘車數の超過を示す南部線欄括孤內數字は第一項長春、寬城子驛上下車數統計の差引員數を扣除したるものである。

前揭兩表には各線別內に於ける原住者の移動數なるものが含まれてゐることは明白にして、差引數に於ては自然同線內の移動數は相殺控除される譯である。故に差引數の指示する東西兩部線の下車數の乘車數に對する超過額は大體同線沿線、背後地方への永住及半永住移民と看て誤りなかるべく、南部線の反對の現象は同地方は北滿として相當早くから開拓された地方である關係上、移民に對す包容力極めて薄弱なるものがあり、加之移民の北滿殺到は同地方住民をして荒蕪地開拓に關し、彼等に先じられまいとの刺戟を受けて邊境地方に移動した形跡が窺はれる、現に露西亞側要人に據れば荒蕪地の開拓は寧ろ遙々渡來する直魯兩省民よりも、經驗を有する北滿原住者に據つて爲されるものださへ謂はれてゐる。

兎も角差引數に現はれた各線別の大小は或程度まで新來移民の分布狀態を地方別に指示するものと謂ふことが出來る。即ち二、三兩年度移民分布數は、松花江下流地方及黑龍江省に徒步四散する者等を含む哈爾濱管區を最高と

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和元年（一九二六） | 四七〇、四五七 | 一八六・〇 | 六八一、五七三 | 一三 | 一、〇五七、二八〇 | 一六六 | 九三三、三四六 | 一五七 |
| 昭和二年（一九二七） | 六三八、三二一 | 二五二・四 | 一、〇二四、〇九〇 | 一五九 | 一、三七六、六〇三 | 二一六 | 一、三七六、〇〇九 | 二三五 |
| 昭和三年（一九二八） | 八一八、三四二 | 三三三・六 | 一、二二四、九六八 | 一七六 | 一、五九七、三六九 | 二五〇 | 一、四三三、〇二五 | 二四五 |

即ち右東支各線別乘車數は下車數に於けると同樣昭和元年度より著增を呈せるを見る、併し乍ら增加率に於て南部線は前掲下車數と比較し可成な差異を認むるも、先に斷つた如く長春、寛城子に於ける乘車數を含む關係からばかりでなく、移民の包容力の點に於て南部線と東西兩部線との間に多大の懸隔あることも注意せねばならぬ。此の間の事情は右乘車數、下車數を差引することに據つて多少明瞭にされ得る筈である。

三、各線別乘車數と下車數との差引比較

左に前掲二表の差引數を列擧する。

乘車數と下車數との差引

| 年次　員數　線別 | 西部線 員數 | 哈爾濱管區 員數 | 東部線 員數 | 南部線 員數 |
|---|---|---|---|---|
| 大正十一年（一九二二） | 二、四四五 | 六二、九九六 | 八五二 | △八、七七三（三、〇七四） |
| 大正十二年（一九二三） | 一一、四二六 | △七、四八七 | 二、七六二 | △一四、〇〇三（△三一、三六一） |
| 大正十三年（一九二四） | 七、六五六 | △四、〇四六 | 一九、〇九五 | △四六、五三四（△三七、〇五一） |

# 第五章　歸還者と滿洲殘留者

以上各章に於いて出稼者數と其の奧地方分布狀態を記述した。故に本章では海路及陸路北寧線に依り離滿するもの〻概算を行ひ、出稼者の中幾許が滿洲に居を構へ、永住並に半永住するかに就いての考察を試みんとするものである。

## 第一節　歸還者總數

歸還の場合に於いても、出稼の場合に於けると同樣、北寧線關係の陸路歸還者數の推算は、海路歸還者數の如く明かなる推算の基準なき爲、極めて曖昧たらざるを得ぬ。本年度歸還總數は概算約六十二萬にして海陸兩路相均分する。以下本數の據つて來る故以を記述する。

### 第一款　海路歸還者

一、歸還者の經由地別考察

海路歸還者の辿るべき經路は殆ど入滿の場合と同樣、大連、營口、安東の順にして、大連其大半を占む。

し、東部線之に次ぎ、西部線は比較的尠なく、南部線に至つては殆ど無いと謂つて差支へない。

併し乍ら西部線（安達、滿溝地方）及南部線に於ける移民包容力は前者に比して低位にあることは寸毫の疑念を懐く餘地も無いが、之等地方には季節勞働者の需要がある譯で、出稼者及永住移民を含む入滿咽喉地に於ける渡來者と全然無關係たるものでは有り得ない。たゞ年内に往復するところの季節勞働者は差引數には自ら相殺されて現はれないのである。

次に南部線を除く各線別の差引數の比率を求めて見るに次の如くである。

| 各線別 | 昭和二年 員數 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % |
|---|---|---|---|---|
| 西部線 | 五五、三五二 | 一七・五 | 三一、三四〇 | 一三・四 |
| 東部線 | 九七、五九一 | 三〇・八 | 八〇、九七七 | 三四・七 |
| 哈爾濱管區 | 一六三、七五七 | 五一・七 | 一二一、二一一 | 五一・九 |
| 合計 | 三一六、七〇〇 | 一〇〇・〇 | 二三三、五二八 | 一〇〇・〇 |

即ち東西兩部線に於ける分布比率は前年度編推定數と略一致し、西部線は昭和二年よりも三年度が減少し、東部線は其の比率を增加した。

然して前二年に於ける北滿定著者は昭和二年約三十一萬六千、昭和三年約二十三萬と謂ふを得べし、前掲長春寬城子乘下車數二年約三十萬三年約二十萬三千に對し、極めて近似せるは兩者相互的に其數の正確を保證せるものと見る事が出來る又前者の後者に對する超過數は北滿內移動者にして荒蕪地に落着したものと解釋することが出來る。

| 仕向地別 ＼ 員數 ＼ 年次 | 昭和二年 員數 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 青島 | 四九、六四七 | 二一・二 | 八二、二二九 | 二七・九 | 一〇三、七一六 | 三一・二 |
| 芝罘 | 六六、五三九 | 二八・四 | 五四、七三九 | 一八・五 | 七一、八六六 | 二一・六 |
| 龍口 | 五八、五九六 | 二五・〇 | 六九、一一三 | 二三・四 | 八三、二〇六 | 二五・〇 |
| 天津 | 四七、六六六 | 二〇・四 | 八〇、九六七 | 二七・五 | 六〇、六六九 | 一八・三 |
| 安東 | 五、八六〇 | 二・五 | 三、六七三 | 一・三 | 七、〇一三 | 二・一 |
| 大連 | 一、三八五 | 〇・六 | 一、三六一 | 〇・五 | 一、七三一 | 〇・五 |
| 其他 | 四、五三五 | 一・九 | 二、七六二 | 〇・九 | 四、一二四 | 一・二 |
| 合計 | 二三四、二二八 | 一〇〇 | 二九四、八四四 | 一〇〇 | 三三二、三二五 | 一〇〇 |

註　本表に於いては營口、安東數字は海關報告數の儘加算した。

本年歸還數は、天津に約二萬の減少ありたるを除外例として悉く增加を呈せるも、三箇年を通じて見るに、青島歸還者は出稼移民激增最初の年度たる昭和二年に於て、芝罘、龍口よりも尠かつたが、爾今次第に增加し、本年度同地歸還數は昭和三年に比し約二萬、同三年に對し約五萬四千の著增である。斯の如く青島歸還者數の漸增的傾向は、時局の漸定に伴なひ、明かに昭和三年上半期までに同地方から流れ込んだ避難民が、時局小康に依り歸還したものなることが考へられる。又天津歸還者の前年に對する減少は本年河南省方面からの避難民が多數同港より營口

最近三ヶ年經由地別海路歸還數

| 經由地＼員數＼年次 | 昭和二年 員數 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 一四一、八五九 | 六五・三 | 一六八、五三〇 | 六一・五 | 二一九、二九三 | 七〇・三 |
| 營口 | 五四、三四三 | 二五・〇 | 八五、八四三 | 三一・四 | 六八、六〇三 | 二二・〇 |
| 安東 | 二〇、九三四 | 九・六 | 一九、三四三 | 七・一 | 二三、九二四 | 七・七 |
| 合計 | 二一七、一三六 | 一〇〇 | 二七三、七一六 | 一〇〇 | 三一一、八二〇 | 一〇〇 |

註　營口乘船數は大連港の場合に於ける移民の一般乘船者に對する比率が昭和二年八七・六%昭和三年八七・四%なるを以て、大體八七%として計算し、安東は背後地等の事情に據り之より稍々低率なるものとして七〇%と看做して計算した。

右に據り本年の海路歸還數は大體約三十一萬と看做して差支へなく、前年に對し約四萬、昭和二年に對し約十萬の増加である。然して之を經由地別に視るに前年に對し大連よりの歸還者は著しく増加し、營口よりの歸還者は減退した。此の間の事情は更に之を仕向地別に觀察することに依り大體窺知し得られる。

二、歸還者の仕向地別考察

即ち最近三ヶ年に於ける海路歸還數を表示して見ると、仕向地別に次の如き變化が認められる。

最近三箇年仕向地別離滿數

寧線に出でたものを加算すると、兎に角本年度陸路歸還者は、海路に於ける歸還者の增加よりも增加率高きことは誤り無いと考へられ、本年度打通線に據り輸送された河南省避難民は全然歸還せずと看做し、同線よりの歸還者及徒步歸還者を約二萬と見積り加算すれば、合計約三十一萬にして、殆ど海路歸還者數と同數ぐらゐが歸還したと看做され、陸路に依る出稼移民と極めて僅少の相違しかない。

以上に據り本年度歸還者の總數は約六十二萬と云ふことになる。

### 第三款　歸還者の月別比較

入滿の場合に於て其の移動に季節的色彩のあることを認め得たと同樣に、歸還の場合にも左記月別比較の如く、其の移動に歸還時期のあることが窺はれる。

大連港乘船者月別統計

| 年次 員數 月次 | 昭和二年 | | 昭和三年 | | 昭和四年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 一月 | 一五、四一四 | 一〇・九 | 一三、一八八 | 七・八 | 二四、三二五 | 一一・一 |
| 二月 | 七、一八一 | 五・一 | 九、八六七 | 五・九 | 八、五四五 | 三・九 |
| 三月 | 一一、四〇〇 | 八・〇 | 一三、〇二〇 | 七・七 | 一九、一〇四 | 八・七 |

を經由して入滿せることに依り、出稼激增年度に於いて青島歸還者の過少であつた例を藉りて說明し得られるが、昭和三年度に於いて時局の爲に北寧線輸送能力に少からざる影響を及ぼし、直隷及山東省西南部に歸還するものが營口乘船、天津上陸の歸還經路に依るもの﹅增加を齎らした事實も、叉其の有力なる原因を爲す。

前揭各經由地別歸還數表示に於ては注意を惹いた昭和四年度大連港歸還數の增加、營口歸還の減退も、斯の如き仕向地別內容の變化と、其の原因を一にするは論を俟たない。

## 第二款　陸路歸還者

陸路歸還者の辿るべき經路は滿鐵線より北寧線に轉乘して歸還するもの、打通線より北寧線に轉乘するもの、徒步によるものこの三通りあるが、前にも斷つて置いた如く正確なる數字が得られない。滿鐵人事課の發表したる最近三箇年の奉天經由歸還數は次の如くである。

| | |
|---|---|
| 昭和二年 | 九九、四一三人 |
| 昭和三年 | 一〇七、三七一人 |
| 昭和四年 | 二八九、五七二人 |

註　昭和二、三兩年度數には瀋陽、皇姑屯兩驛下車數の加算なし。

右列擧の歸還數は註記の如き事情あるを以て之に據り直に增加率を求むることは出來ないが、之に打通線から北

洲に居を構へたもの、一時的歸還等の移動なることを想像せしむるものであり、本年度歸還者の多數を示した一因として、此の種の歸還者が前二年山東、河北兩省の治安紊亂に阻止せられた事情も留意するの必要があらう。

尚歸還者の移動を一年を三期間に區分して表示すれば左の通りである。

| 期別＼年次 | 昭和二年 員數 | 昭和二年 % | 昭和三年 員數 | 昭和三年 % | 昭和四年 員數 | 昭和四年 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一月—四月 | 四六、一二一 | 三二・五 | 四四、九二一 | 二六・七 | 六七、一三一 | 三〇・六 |
| 五月—八月 | 三三、六七三 | 二三・七 | 四五、三五六 | 二六・九 | 六三、〇四九 | 二八・八 |
| 九月—十月 | 六二、〇六五 | 四三・八 | 七八、二五三 | 四六・四 | 八九、一一三 | 四〇・六 |
| 計 | 一四一、八五九 | 一〇〇 | 一六八、五三〇 | 一〇〇 | 二一九、二九三 | 一〇〇 |

歸還期と他の兩期間との相違は出稼の場合に於ける出稼期間と其他の期間以外との相違程懸隔がなく、殊に本年に於て然るを見るは大體出稼及移住を目的とせざる避難民の歸還があつたと見るべきである。

## 第二節　移民の定著力

### 一、本年度滿洲殘留者數と經由地別比較

歸還總數が判明しさへすれば滿洲殘留者數を知ることは極めて簡單で、出稼者總數から之を控除しさへすれば得

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 四月 | 一二、一二六 | 八・五 | 八、八四六 | 五・二 | 一五、一五七 | 六・九 |
| 五月 | 一〇、〇三八 | 七・一 | 一〇、四七六 | 六・二 | 一六、九三三 | 七・七 |
| 六月 | 八、九七二 | 六・三 | 一〇、七三七 | 六・四 | 一七、八八五 | 八・二 |
| 七月 | 六、九七八 | 四・九 | 一二、三〇四 | 七・三 | 一四、一七〇 | 六・五 |
| 八月 | 七、六八五 | 五・四 | 一一、八三九 | 七・〇 | 一四、〇六一 | 六・四 |
| 九月 | 九、七二〇 | 六・九 | 九、五四一 | 五・七 | 一五、一四三 | 六・九 |
| 十月 | 一三、二二八 | 九・三 | 一五、一二七 | 九・〇 | 一九、八一九 | 九・〇 |
| 十一月 | 一六、八〇九 | 一一・八 | 二二、七二二 | 一三・五 | 二七、八一六 | 一二・七 |
| 十二月 | 二二、三〇八 | 一五・七 | 三〇、八六三 | 一八・三 | 二六、三三五 | 一二・〇 |
| 合計 | 一四一、八五九 | 一〇〇 | 一六八、五三〇 | 一〇〇 | 二一九、二九三 | 一〇〇 |

註　本表數字は大連港乘船數のみにして、營口、安東は結氷に依る航行不能期間があり、奉天は多少推定に不滿の點あるを以て之を省略した。

即ち各年とも十月以降及一月が多く、大體此の期間を以て歸還時期と看做し得る。何故に斯の如く冬期の四箇月に彼等が歸還するかに就いては、說明を俟つまでもなく、滿洲の經濟狀態は原始產業を中心として構成され、一般勞働市場にも稍々季節的性質を帶び、事業に依つては結氷期間中全く休眠狀態を現出することあるに基因する。併し乍ら、其他の期間に於ける移動數と雖も、相當の數にわたるは吾人の豫想外とするところであつて殊に出稼者數の最高を示した三月に比較的高率の歸還者あるは、內地滿洲間との邦人の往復に見ると同性質の移動、即ち滿

次に本年度の歸還數及殘留者數を前二年と對照して如何に增減したかの比較を試みる。

最近三箇年入滿數と離滿數との差引比較

| 年次 | 入滿數 | | 離滿數 | | 差引數 | |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| | 員數 | % | 員數 | % | 員數 | % |
| 昭和二年 | 一、〇五〇、八二八 | 一〇〇 | 三四一、五九九 | 三二・五 | 七〇九、二二九 | 六七・五 |
| 昭和三年 | 九三八、四七二 | 一〇〇 | 三九四、二四七 | 四〇・二 | 五四四、二二五 | 五九・八 |
| 昭和四年 | 一、〇四六、二九一 | 一〇〇 | 六二一、八九七 | 五九・五 | 四二四、三九四 | 四〇・五 |

註　昭和四年數字は北寧線關係の奉天驛乘下車數の一切を含むも、二三兩年度には瀋陽、皇姑屯兩驛の乘下車數共省略されてゐる

以上に依り本年の出稼者數に對する歸還者數は前年に對し右表比率の指示するが如く確に多數を占めた。けれども之を以て直に本年度渡來者の定著率に論及することは早計である。即ち本年度歸還者の移動情勢を見るに前二年度移民激增に依り堆積した移民が時局の小康に依り歸還したるの事實は、激增年度に於て最も避難民を滿洲に送つた青島への歸還者の異數の增加に據つて明白である。故に寧ろ本年度移民の定著が減退の程度は出稼の場合に於ける北行者の減退、大連上陸者中男子に對する女子比率の低下及職業別に現はれた農業勞働者の減少に據り、之を推知すべきが穩當であらうと考へる、因に打通、洮昂兩線に依り、興安屯墾區及黑龍江省各地方に入込んだ河南省避難民には殆ど百%の定著があたつと思惟されるのである。（以上）

られる譯である。次に本年の殘留者に就いて經由地別に列擧して見る。

| 入滿、離滿數／經由地別 | 入滿數 員數 | 入滿數 % | 離滿數 員數 | 離滿數 % | 殘留者數 員數 | 殘留者數 % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 四九五、四一五 | 四五・九 | 二一九、二九三 | 三五・二 | 二七六、一二二 | 六〇・三 |
| 營口 | 一九〇、一七八 | 一七・六 | 六八、六〇三 | 一一・〇 | 一二一、五七五 | 二六・五 |
| 安東 | 三七、四八九 | 三・五 | 二三、九二四 | 三・九 | 一三、五六五 | 三・〇 |
| 海路計 | 七二三、〇八二 | 六七・〇 | 三一一、八二〇 | 五〇・一 | 四一一、二六二 | 八九・八 |
| 陸路 | 三五六、九一八 | 三三・〇 | 三一〇、〇〇〇 | 五〇・〇 | 四六、九一八 | 一〇・二 |
| 合計 | 一〇八、〇〇〇 | 一〇〇 | 六二一、八二〇 | 一〇〇 | 四五八、一八〇 | 一〇〇 |

即ち本年度滿洲殘留者數は約四十六萬にして、出稼移民の約四二%である。右表に於いて注意すべきことは海陸兩路の關係が、入滿の場合と離滿の場合に異常なる懸隔が認められ、延いて陸路に於ける殘留者の極めて少數なる現象を呈せることである。說明を加へるまでもなく北寧線歸還者の巨數を占むるに因るものにして、右は從來屢々記述せられたる如く、滿鐵本線に歸還者に對する何等の特點が與へられてないこと、乘船切符購入に當り貨幣兌換の兎倒があること等が影響するも、特に本年歸還時期に金對銀の相場が支那人にとつて從來に見ぬ程不利に動いたことが、陸路歸還者に多數を呈した有力なる原因なるに違ひない。

二、最近三箇年殘留者數比較

昭和五年五月五日印刷
昭和五年五月十日發行

定價金六拾五錢

編輯兼發行人　南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課　佐田弘治郎

印刷者　大連市近江町九十一番地　山田浩通

印刷所　大連市近江町九十一番地　東亞印刷株式會社大連支店

發行所　南滿洲鐵道株式會社

取次販賣所　大連市紀伊町九十一番地　社團法人　中日文化協會